

The Kansai University Bulletin

Osaka, June 15th, 1927—No. 50

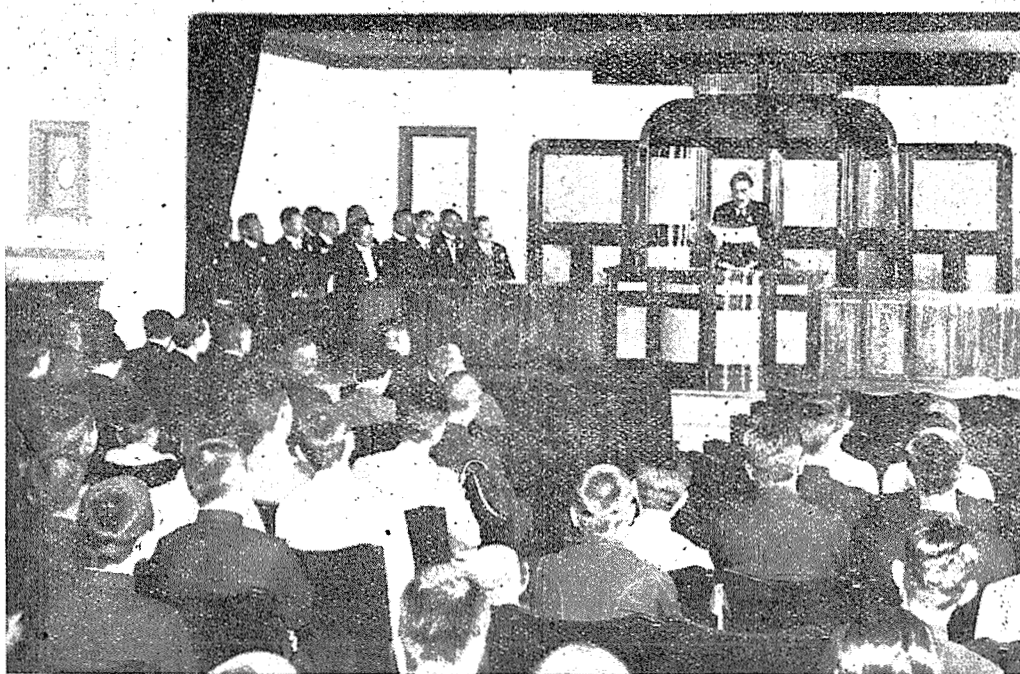
報學山里子

行發日五十月六

號念記年周五刊創

年二和昭

The Completion of the Administration Building celebrated, and Mr.M. Ogura, managing director of Sumitomo Goshi-Kaisha, greeting the Occasion.



式工竣館本竝式念記年周五格昇
(氏恒正倉小事理務常社會資合友佐の中讀期詞祝は上壇)

阪大

堀佐土話電
番〇七五五・九四〇一

局報學學大西關

座口金貯替振
番五七八二一阪大

號十五第

千里山學報 第五十號

目次

- 挿繪——本學昇格五周年記念式及び本館竣工式
(表紙)——ジード教授の胸像——デュギイ教授及び
その自署——新聞學會發會式記念撮影と當日來講
の大江、高石兩氏——來講せる大阪市長關一氏——
村上教授渡歐記念撮影——吉永正好氏の近照——全
國中等學校學生優勝雄辯大會優勝旗授與——同上
記念撮影——大學豫科學生學外辯論大會記念撮影
——關西大學學報局同人
- 千里山學報創刊五周年に際して
- 關西大學學長 松本 燕治
法學博士
- ジード教授生誕八十年の賀に際して
- 關西大學教授 宮島 綱男
- デュギイ教授の風手に接して
- 關西大學教授 佐々 穆
ミユツセ小論 關西大學講師 河盛 好藏
- 學内報——本學專任教員團の記念事業計劃——新聞
學會發會式——教授村上喜貞氏の出發——大阪市長
關一氏の來講——本學軍事教官の更迭——學級委員
任命式——學友會委員任命式——運動選手宣誓式——
本學五周年記念式——本館竣工式並圖書館起工式
舉行——附屬第二商業學校發報
- 校友の面影——吉永正好氏
- 校友發報
- 學生發報
- 學生寄稿——經濟學に於ける主觀主義と客觀主義
- 山岡總理事と千里山學報
- 關西大學 辰巳經世
學報局主任
- 千里山學報創刊五周年所感
- 雜錄

千里山學報創刊

五周年に際して

關西大學學長 松本 燕治
法學博士

新聞、雜誌その他の定期刊行物が、相
當永い期間に亘つて發行を繼續して居
るとしても、ただそれだけで、その刊
行物の價值を主張する根據となり得る
わけのものでないことは勿論である。
我が關西大學の唯一の報道機關である
『千里山學報』が、本月を以て滿五周年
を迎へたといふことも、ただそれだけ
では必ずしも誇とするには足らぬと考
へる。是非共同時にその内容の如何を
考量しなければならず、又これを動的
に見て、常に相當の發展の蹟を示しつ
つあるか否かを明確めねばならぬ。
謂はば同誌の主宰者の側に立つ者の一
人である私自身としては、徒らに自畫
自讃に類するが如き言を爲すことを差
控へなければならぬが、批評的に見て、
幾多改善の餘地はあるにしても、兎も
角も我が『千里山學報』は、形式内容と
も大學の學報として、少くとも大して
恥しくないだけのものではあり得ると
思ふ。又その發展度に就ても、或は創
刊以來の年月の長さど比例して、極め
て遅遅たるものに過ぎないかも知れな

いが、尙は何程かづつ常に進歩しつつ
ある事實は公平なる第三者の見地より
しても、之を觀取し得ることと信する。
この意味に於て校友その他の關係者各
位並に學生諸君と俱に、ここに同誌が
滿五周年を迎へ得たことを慶賀した
と思ふ。

而して再び前に戻つて、五ヶ年間發行
を繼續し得たといふ單なる事實も、こ
れを同誌の内容若くは機能といふ點に
關聯して觀察するならば、幾多の重要
なる意味を包藏して居るものと考へ
る。即ち、同誌は第一に大學の謂はば
官報であつて、發展途上に在る我が關
西大學の、大學としての行事を月記
述して居る。第二に校友各位の個人的
及び團體的活動の狀況を報ずるもので
ある。第三に學生諸君の各方面に互
る活躍の模様を傳へるものである。以上
を主たる機能として、第四に教授講師
各位の研究述作の發表機關をも兼ねて
居る。これらの諸機能を有するといふ
點から考へるならば、同誌が兎も角相
當の頁數を維持して月月發行されて居
り、且つかくあること既に五ヶ年に及
ぶといふことは、少くともこの期間中
大學そのものが、校友各位が、學生諸
君が、將た又教授講師各位が、それぞ
れその立場に應じて常に意義ある活動
を續けつつあることを意味するものと

言はなければならぬ。従つてこの事實
は、單り『千里山學報』のみの問題でな
く、全體としての我が關西大學のため、
直接間接にその健實なる發展を希望す
る者總てが、同慶の意を表すべき所で
あると信する。

最後に私は『千里山學報』の今日在る所
以を、當然の事實として何等感謝の辭
なく看過するわけには行かぬ。先づ直
接同誌の編輯の事に當つて來た辰巳經
世君その他の人人の努力を推賞せねば
ならぬ。併し乍ら同誌をして前述の諸
機能を相當に發揮せしめつつある所以
は、畢竟するに校友その他の關係者各
位、教授講師各位、並に學生諸君、即
ち所謂オール關西大學の渾一的努力と
支持の賜に外ならぬと言はなければなら
ぬ。従つて又、同誌將來の繼續發展
の原動力も、結局全く同じこの點に存
するものと言ふの外はない。この意味
に於て、主宰者の側に立つ者の一人と
して、私はこれら各方面の人人に對し、
過去に向つて深く感謝を捧げると共
に、更に將來に向つて、一面には同誌の
直接の後援鞭撻を希ひ、他面をそれぞれ
その立場に應じて一層健實なる活動を
續けられることに依り、間接に同誌を
して益内容を充實せしめ、愈その機能
を發揮せしむるやう力を盡されんこと
を切望して已まぬ次第である。

ジード教授生誕八十年の賀に際して

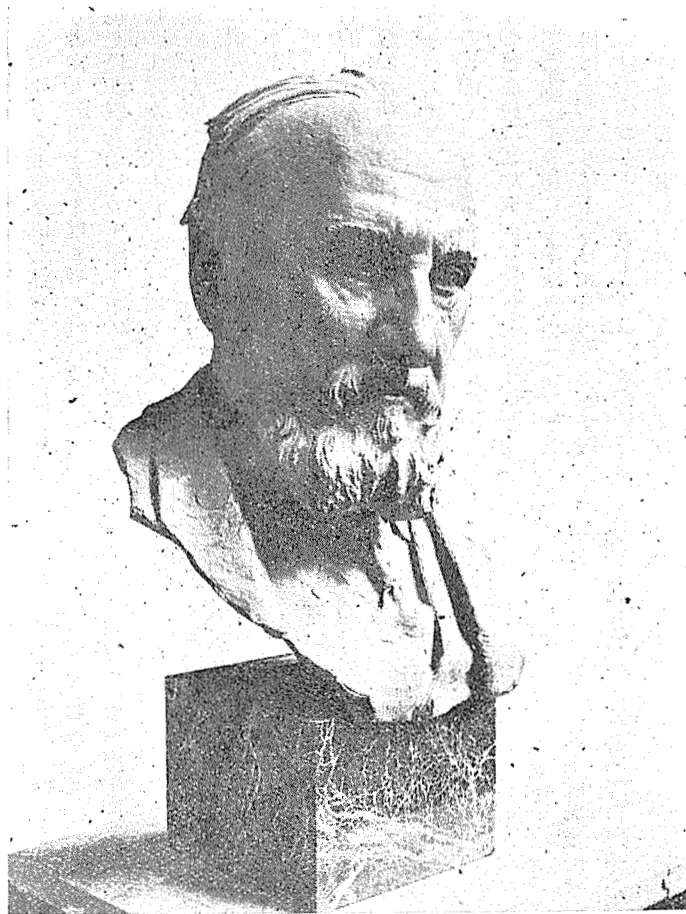
關西大學教授 宮島 綱男

舊師ジード先生第八十回の誕生日を迎ふるに際して先生の面影の一端を叙し聊か祝意を表し度いと思ふ。由來西洋の學者——特に經濟學者——は一般に長命のやうである。ジード先生も自ら『經濟學者は長生する』と云つて居られるが、我國では大學教授の職に就ても定年の制度があつて六十歳前後で退職するやうになつてゐる。外國では此位の年齢からほつぽつ圓熟せる研究を發表し始める學者が少なくないやうである。今私が關係してゐる經濟學界に就て見ても今年八十歳になる有名な學者が佛・獨・米に各一人宛見出される。即ちフランスのジード先生、ドイツのカル・ビュヒャー(Karl Bücher)（一八四七年二月十六日生）及びアメリカのゼー・ビー・クラーク(J.B. Clark)（一八四七年一月二十日生）是である。さてジード先生であるが、一般經濟學者としての先生を紹介することは之を他日に譲り、ここでは單に其略傳と消費組合運動に關する先生の事蹟を簡單に述べて遙に先生の學德を忍び健康を祈るよすがとしやう。

ジード先生 Charles Gide は一八四七年六月二十九日南フランスのユーゼ(Juaze)（工業地ニーム(Nîmes)の附近）に云ふ所で同地の裁判所長タンクレード・ジード(Tancrède Gide)の息として生れ、生地的高等學校及びパリ大學で教育を受けた。一八七四年アグレゼ(Agreze)の資格（大學教授たり得る資格）を得、一八七

九年ボルドー大學の經濟學教授になつて學究生活を初め、一八八一年にはモンペリエ(Montpellier)の大學に榮轉した。此地に於て先生は當時社會問題の研究者として有名であつたボァーヴ・ド・ボーヴ及びフォル・A. Faure等と相知つたが、之が抑も先生の消費組合運動に關係する契機になつたのである。即ち

を遇した。次いで一八八六年先生はリオンに開かれた消費組合聯合大會の議長に推されて更に名聲を博した。ここに注意すべきは此聯合大會に於ける先生の開會演説である。此演説に於て先生は消費者保護に對する自己の立場を闡明し、特殊階級のみが利益を得るやうな現在の經濟組織は



（照參明説繪挿項別）像胸の授教ドージ

『フーリエの豫言』(“Propheéties de Fourier”)と題する先生の處女講演は大いに世の視聽を聚め、殊に全フランスに於ける消費組合運動者の稱讃を贏ち得たこと非常であつて直ちに該運動のリーダーになつたが、同志の人達は自分達の仲間に權威ある理論家を迎へたこと云ふので殆ど渴仰的な尊敬と好意を以て先生

之を打破すべきこと、並びに此目的達成の爲めに消費組合運動が進むべき方向を指示した。然るに斯くの如き先生の主張や態度は他の經濟學者舉つての反對を招き随分極端な批難を浴びせられた。其理由は主として先生が單に運動の理論家としてののみならず自ら實際運動に携つたこと云ふにある。

超えて一八八九年先生はパリに開かれた萬國消費組合聯合會に出席して今後資本主義的經濟組織の下に於ける生産者に對抗して消費者自らが進んで採るべき方途に就きの確なるプログラムを定め、實際運動は之に依るべきことを高調した。然るに當時フランスには消費組合聯盟の二大系統が對立して居つて、一は通常ニーム派と稱へられ穩健なる主張を基として進まんとし、他は社會主義的色彩の強い急進的な旗幟の下に勇往せんとした。斯かる状態に對し先生は此二大聯盟を合併し其中庸を以て同一の目的達成の爲めに和衷協同せしめんことを唱導し、一九一二年遂に其努力に依つて此二大系統の聯盟の合併を成就せしめたのである。

一八九八年先生はパリ大學社會經濟學正教授に任ぜられてモンペリエを去つた。而して一九二一年同大學の名譽教授となりコレージュ・ド・フランス(Collège de France)に轉ずるまで其地位に在つた。此間先生は實際運動を差控へて主に理論の研究に没頭し多くの著述を公にせられた。其主なるものは別表に示す通りであつて、先生の理論的立場は大體イギリス正統學派とドイツ歴史學派との折衷的思想の上に一の進歩的な理論、即ち協同主義(Coopérisme)に基く消費組合制度に依り平和且つ漸進的に現代の資本主義的經濟組織を改造せんとの主張を展開するところにある。先生は其後大學に於ける教職の外にフランス勞働局の評議員、或ひは元來關係深い消費組合大聯合の評議員又は中央委員會委員等に擧げられること數次、現に尚ほコレージュ・ド・フランスの教授たる外種種の公的職務に携り

壯者を凌ぐ熱意と精力を以て研究し實際運動に精進してゐる。

尙ほ先生が消費組合運動に就て世界的に重きをなし且つ其理論が遍く推賞せられるに至つた大なる原因の一は、先生が一九〇二年七月イギリスに開かれた同國の消費組合聯合大會に聘せられてなしたこの演説である。

題して『ロッテデールの先驅者』(“Pionniers de Rochdale”)云ふものに其一節をひいて先生が此運動に對する見解の一端を次に示さん。

『ロッテデールの先驅者等が相圖つて彼の消費組合を創始した當時、世には有力なる經濟學者や賢明なる社會主義者が數多く在つた。

曰くゼー・エス・ミル、バスター、ブルードン、正に是多士濟濟の有様である。而かも之等經濟學者、社會主義者の何人かが此大いなる將來を有せしロッテデールの消費組合に能く一顧を與へたであらうか、否！然るに見よ、

今日之等の學者及び主義者が理想として主張したる社會制度を信奉する者、或ひは又彼等の理論と著述に傾倒する者果して幾人かある。翻つて彼のロッテデールの先驅者に與する者の數は僅に數百萬人を算するではないか。若し今日の此狀態を往年の學者、主義者等に知らしめたならば、恐らく彼等は地下に於て驚嘆惜く能はざるものがあるであらう。噫！

ロッテデールの先驅者よ、余は諸卿に對し深甚の敬意を表す。即ち諸卿は第十九世紀を通じて成功せる唯一の社會運動たる消費組合の組織を吾人に教へ、以て人類生活の上に根本的改變を招來せしめたのみならず、更に吾人に示すに大いなる教訓を以てした。何ぞや、曰く從來の學問も思想も理論も、諸卿數人の

謙讓なる勞働者が爲せる實際行爲には遂に如かざることを遂かりきてふ一事である。換言すればす時も免れ得ざる筋肉勞働の苦痛とパンに對する絶え間なき不安、而かも何時かは遂に正義の地上に到るあつて世を人を濟度すべし云ふ信仰とは相合して勞働者に一の力強い信念を與へる、此信念の外には學問に依り又は書物に依り何等教へらるるなき其勞働者が斯くの如き大事業を成し遂げた。云はば學問も書物も解決するを得ざりし社會改造の大問題を僅か數人のロッテデールの職工が實行に依つて之を解決した。之に對し吾人は滿腔の敬意を表せざるを得ぬのである。』

之に依つても知らるる如く先生は一方に今日の資本主義的經濟組織に満足せざるを同時に、他方に於て革命的社會主義運動も亦以て理想的社會を將來する所以にあらずし卓ら消費組合運動の裡に社會改造問題解決の鍵を求めんとしてゐるのである。此主張の根據となるは即ち社會連帶の思想である。

先生の傳記並びに學問的立場に關しては拙著『經濟學原理』上巻中にも多少述べて置いたが、尙ほ一九二五年十二月から一九二六年四月にかけてのコレージュ・フランクスに於ける先生の諸講義を集めて公刊せられた『エコール・ド・ニーム』(“Ecole de Nîmes”)なる書中に詳細に書かれてゐる。誠に先生自身が世に書き送れる如く、本書は實に先生の一代記とも稱すべきものである。最後に先生の諸著作を紹介しやう。

1. Le Droit d'Association en matière religieuse (Thèse de Doctorat), 1872.

2. Principes d'Economie Politique, 1883, 25^e éd., 1925.

3. Oeuvres coisies de Fourier, avec Introduction, 1890.

4. Coopération, Conférence de Propagande, 1890, 5^e éd.

5. Les Institutions de Progrès Social, 1903, 5^e éd., 1920.

6. Les Sociétés Coopératives de Consommation, 1905, 5^e éd.

7. Cours d'Economie Politique, 1909, 8^e éd., 1923.

8. Histoire des Doctrines Economique depuis les Physiocrates jusqu'à nos jours, en collaboration avec Ch. Rist, 1909 (récompensé par l'Académie) 5^e éd., 1925.

9. Premières Notions d'Economie Politique, 1921.

10. Collège de France に於ける講義は原則として公刊されることになつてゐる、既刊のもの十數種に達す。

11. ジョド先生自ら監修せる Revue d'Economie Politique を始め世界の主なる經濟雜誌に公にされた論文數に二千八百餘に及ぶ。

挿繪説明 圖はジョド先生の胸像である。作者はパリの彫刻家フェルナン・デュボア。E. Fernand Dubois であつて像は實物より大きい。因に南フランスの工業都市ドカズヴィル Decazeville にジョド小公園(Place de Gide)なるものが出來て其處に先生の此胸像の原作が消費組合運動の同志に依つて建てられたことを云ふのである。

デュギイ教授の風采に接して

關西大學教授 佐々 穆

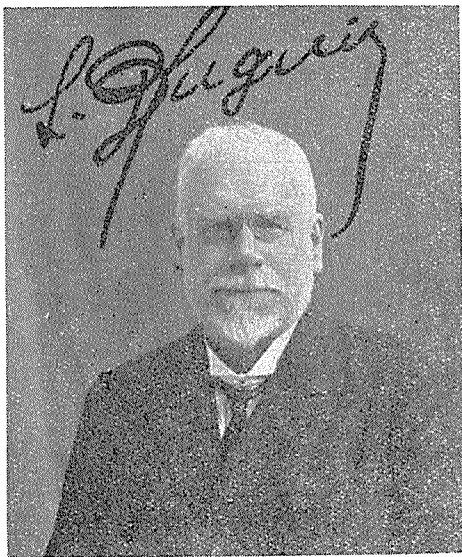
一

去る四月の新學期から本大學法律科佛法科に於ては宮島教授指導の下に佛國法律學界の實證派第一人者たるレオン・デュギイ教授の名著の一たる私法變遷論 (Les Transformations Générales du Droit Privé depuis le Code Napoléon) を研究して居る。然るに今回デュギイ教授は宮島教授に宛て其の自署せる寫眞を寄贈されたので本學は之を感謝し且つ永く其の風貌を偲ぶがために之を本館内の一角に掲げることにした。之を機會にデュギイ教授の思想の大體を紹介することも強ち徒爾ではあるまいと思つてこの小篇を草した。

デュギイ教授は既に二十年以上も佛蘭西ボルドー大學に於て憲法の講座を擔任して居るが其の處女作の『人々の名義』(Les Constitutions et les Principales Lois Politiques de la France depuis 1789, 著 Henry Monnier) の共著で一八九八年に出版された。本書の特色は専ら實證主義に屬する法律哲學の見地から佛蘭西憲法上に於ける特殊問題を取扱つた點に存する。其以後に於て現はれたるデュギイ教授の實證主義法律學の理論的根據は何れも此の處女作中に之を見出すことが出来るから是非とも一讀の必要がある。一九〇一年及び一九〇三年には Etudes de Droit Public 二卷を發行した其の第一卷は L'Etat, le Droit Objectif et la Loi Positive として根本原則の主なるものに就て精緻なる説明を試みて居るが法律の本

質に關する一般原則及び法律對國家の關係に就ての教授の持論は本書の中に最も能く現はれて居る。之等の諸點に關する展開は其の後即ち一九〇八年に Le Droit Social, le Droit Individuel, et la Transformation de l'État の標題の下に高等社會學院に於ける講演に於て述べられ其の講義は其の儘發行され既に三版を重ねて居る。昨年國家變遷論の名を以て木村龜二氏の手に翻譯され岩波書店から發行されて居る。デュギイ教授は更に私法の研究に一般の注意を向け一九二一年には私法變遷論即ち現に本學佛法科で研究してゐる名著を出したが更に翌年には公法變遷論 Les Transformations du Droit Public を公にした。この公法變遷論は英米法學界の第一流の政治學者たるラスキイ教授の手に依つて英譯されて居る。以上の外主要なる論文として教授が公にされたものは左の通りである。

Le Droit Constitutionnel et la sociologie; Revue internationale de l'enseignement, 1889.
L'élection des sénateurs; Revue Politiques et Parlementaire, 1895.
L'acte administratif et l'acte juridictionnel; Revue de Droit Public, 1906.
De la situation des particuliers à l'égard des services publics; Revue de Droit Public, 1907.
De la responsabilité Pourant naître à l'occasion de la loi; Revue de Droit Public, 1910.



署名のそび及授教キギユデ

La représentation syndicale au Parlement; Revue Politique et Parlementaire; 1911.
Law and the State; Harvard Law Review, 1917-8.
Collective agreements; Yale Law Journal, 1918.
尙ほ我國に於てデュギイ教授を最も能く紹介されたのは牧野英一氏であるが左の如き紹介者もある。
岡村司氏「權利否定論」(京法、四)

織田萬氏「社會連帶論」(京法、二)

「社會連帶論について」(法志、一五)
「法律的方法と社會學的方法」(穂積先生還曆祝賀論文集)
「佛國法に於ける公共役務の觀念」(法論、六)

杉山直次郎氏「デュギイの權利否定論の批判」(法協、三四)
高柳賢三氏「道德及社會心理と法律」(新法學の基調)

中島重氏「デュギイの法律思想」(同前論、一八)

「デュギイの國家論」(社會科學、二一)
板倉進氏「デュギイ「公法の進化」」(社會科學、一七七)

牧野英一氏「現代の文化と法律」刑法と社會思潮

二

或學者はデュギイ教授の社會連帶論は佛國ボルドオの同僚デュルケムの感化を受けて居るといふ。成る程デュルケムの名著社會分業論 De la Division du travail social は社會學的方法論に依り全然科學的實驗的の見地からして社會分業の現象を沿革的及び民族的に研究し分業の理論を經濟學より社會學に擴大して其の道義的基礎を闡明し社會分化に依りて初めて各個人は其の好む所を長ずる所に依りて自己の社會作用を定むるを得ざるを以て茲に社會心なるものの實在を證明し之を分析解釋してゐるのであるから同じく社會作用を各個人に認むるの點に於てはデュギイ教授は探を一にしてゐるがデュギイ教授はデュルケムの所謂社會心なるものは之を否定し、有ゆるこゝが個人心の内容に於て表現されることを力説し之れ事物を如實に觀察して見れば極めて明瞭に首肯し得るこゝだといつてゐる。従つて一般意思の表現であるとしての法律の本質に關する舊來の思想を強く排斥し尙更らに存在しない國家意思の表明としての法律を否定し法律は之を票決する或個人の意思の表明に外ならぬ主張して居る。曰く『佛蘭西に於ては法律は代議院及び元老院に於て常に

多數黨を構成する三百五十の代議員と二百の元老院議員の意思の表明である。事實は之に盡きる。これ以外のこゝは單なる擬制であり空虚なる主張形式に外ならぬ。吾等は最早やそれを欲しない』而して個人意思の表明としての法律が拘束力を有するの所以は所謂社會相依の事實の上に築かれたる客觀法原則を表明するからである。客觀法原則とは人類が正に社會的集團の部分を否な人類全體の一部分を構成せるといふ事實に依つて彼等に課せられたる行爲の規律の謂に外ならぬ。而して集合體たる國家も亦個人も何等の權利を有せないで個人は其れが社會的存在なるの故に社會的規律に服従する義務を有するに過ぎないのである。此の社會的規律たる客觀法は其の與へられたる名稱と基礎の如何を問はず確實に存在する。否な存在しないわけには行かない。何故ならば之れなくしては社會は存続しないであらうから。總ての社會は一個の訓練である、そして人間は社會なくしては生存し得ないが如くに彼は一個の訓練の下に服従してのみ生存し得るのである。

三

個人も個人の集團も何等の權利を有せずして唯社會的規律としての客觀法に服従し個人に課せられたる對社會職能を履行する義務を有するに過ぎぬこのデュギイ教授の義務本位の法律思想は其の濫觴を佛國社會學の始祖オリギュスト・コムトに發するものであつてデュギイ教授の諸著書の中には「美なる語句」の名の下にコムトの主張の一句が屢屢引用されてゐる。即ちコムトの「實證政治學體系」の一八九〇年版第一卷第三百六十一頁に曰く『原

因こいふ言葉が哲學上の用語から除外されねばならぬ如く、權利こいふ觀念も政治學上の用語から除外されねばならぬ。この二個の神學的純正哲學的觀念の中、一即ち原因こいふ觀念が不合理であり且つ詭辯的であるこ同じやうに他の一即ち權利こいふ觀念は反道義的なものである。超自然的意思想より出發する規律的な力が存在するこいふこが假定せられる範圍内に於てのみ眞に權利こいふものは存在し得るものである。而して此の神政的權威に反抗するために五世紀以來の純正哲學は所謂人權なるものを導き入れたのであるがこの人權は單に消極的作用を爲すのみであつた。人人がそれについて眞に有機的職分を與へむこ試みた時にはそれはやがて個人性を神聖化するに傾く反社會的性質を示すに至つた。神格を許容しない實證的狀態に於ては權利の思想は挽回し得ない形に於て消滅するものである。各人は諸種の義務を有する。而かも萬人に對して義務を有する。然し何人も何等權利を稱し得るものを有しない、換言せば何人も自己の義務を常に履行する權利以外の權利を決して有しないのである』と。デュギイ教授の法律體系は正に之に盡きるのである。人間の社會的關係の重要因素たる社會的分業に依る連帶と利害の共通に依る連帶とが社會生活に於ける人間相互を結合するこころの相互依存の事實を爲すの點より見て個人の對社會的職能としての義務本位の思潮を高調する所にデュギイ教授の核心が表はれて居る。個人の天賦人權なりこされたる所有權力乃至は契約締結權の絕對性不可侵性が今や到る

處に於て崩壞されつつある所謂法律社會化の現代に對し斯くの如き義務本位の強き主張が如何に偉大なる貢獻を爲したかは想像に餘りある。獨逸共和國憲法第一百五十三條第三項が『所有權は義務を包含す、所有權の行使は同時に公共の福利の爲めにするこを要す』と規定し、同第一百五十五條第三項が『土地の開拓及び利用は土地所有者が社會公共に對して負ふ所の義務を、勞働或は資本を用ゐずして生じたる土地價格の増加は社會公共の福利の爲めに之を費すこを要す』と規定したるが如きは正にデュギイ教授の義務本位の思想の條文化と見るべきであると思ふ。

四

更にデュギイ教授は國家の有すると稱せらるる公權力を否定する。即ち公權力は權利ではなくして一個の單純なる事實、最大實力こいふ事實である。統治者たちは總ての黨派及び總ての階級に依る意識的且つ規則的參與に依つて形成せられたこの多數黨の代表者たちとなる。この事實に依つて彼等は事實上最大實力を把持し實質的強制を行ふものである。而して彼等は客觀法原則に従ふこに依つて此の原則が其の適用を實現するために彼等の最大實力の行使が認められるのである。換言すればこの法原則を確定し、この法原則を犯す總ての個人の行爲を抑壓し、この法原則に適合する總ての個人の行爲を認定するものである。要するに彼等統治者は社會的相互依存を保護する爲めに彼等の把持して居る最大實力を使用するの義務を履行するの權力以外の權力を有しこいのである。茲に國家責任の一

般的原理を認める一の法理が確定されて來るのである。斯くて統治者の諸義務なるものを強く高調し救助、教育、休業に對する保險の諸義務が統治者に課せられて居るこを示し統治者は他の個人と等しく個人であつて決して所謂集團人格者の機關ではなく他の個人と等しく彼等統治者は其の社會に於て占める地位に相應したる義務を課し及び其の結果として自己の把持せる最大實力を社會的相倚のために役立つやう行使するの義務を課するこの客觀法原則に服従するの外何等の權力を有しないのである。而して統治者は單に不作爲を強要せらるるに止らないで作爲をも強要せらるのである。此の作爲の義務が救助、教育、勞働保險に對する法律上の義務として現はれるものである。デュギイ教授の前には絕對不可侵性の無制限なる國家主權の思想の如きは一の怪物としか思はれないであらう。公法の進展に貢獻しつつある教授の努力は大なるものであつて其の批判は暫く別とするも其の學問上に於ける精進に對しては甚大なる敬意と感謝とを拂ふべきである。

因に左に掲げるものは、同教授が肖像と共に本學宮島教授に寄せられた書信である。

Bordeaux, le 4 avril 1927.

Léon Duguit,

10, Rue Labottière, 10

Bordeaux

Monsieur le Professeur Miyajima,

Osaka, Japon.

Mon cher Collègue :

Je vous remercie de votre aimable lettre et aussi du livre si curieux et si intéressant que vous avez bien voulu m'envoyer.

Le théâtre de poupées est l'expression d'une littérature tout à fait spéciale et je partage tout à fait l'opinion qu'a exprimée en des termes si excellents Monsieur Claudel notre ancien ambassadeur, dans la très remarquable préface qui est placée en tête du volume.

Je suis profondément flatté de la décision qui a été prise par l'assemblée générale de votre faculté droit concernant mon livre "Les transformations générales du droit privé depuis le Code Napoléon"

Nous avons à Bordeaux quelques-uns de vos compatriotes qui sont venus suivre mon enseignement; je suis particulièrement heureux et honoré que cet enseignement ne s'adresse pas seulement à eux, qu'il s'étende à votre faculté dont c'est pour moi un très grand honneur de devenir ainsi le collaborateur.

Vous voulez bien en outre me demander ma photographie, mais en ce moment je n'en ai pas de grand format. Je n'ai que la petite que je vous envoie; à la rigueur vous pourriez la faire agrandir.

Je vous l'adresse avec d'autant plus de plaisir que j'y vois un nouveau lien qui me rattachera à votre faculté.

Veillez agréer, mon cher collègue, l'assurance de mes sentiments les meilleurs et les plus distingués

Professeur Léon Duguit.

「ミュッセ小論

關西大學講師 河盛好藏

アルフレッド・ド・ミュッセ（一八一〇—一八五七）の戯曲集を飾る傑作の「マリアンヌの氣まぐれ」云ふのがある。處は伊太利のナポリ、時代は文藝復興期。今手短かに筋を話す、セリオ云ふ美しい、若い、さうして全く初心な貴族の青年が居る。彼は老いて醜い裁判官クラウチオの美しい妻マリアンヌに身も世もあらぬ戀を捧けて居る。その爲に或る時はシウタミ云ふ老女に取持ちを頼んだり、樂人を雇つて女の家の窓の下でセリナードを奏して見たり、思ひのたけをこめた手紙を送つたりするのだけれど、マリアンヌは甚だ貞淑で一向相手にしない。セリオは深い憂鬱に沈んで居る。それを見た友人のオクターブは、放蕩者ではあるが親切で友達思ひの此の青年は、クラウチオとは親類の端くれであるのを幸ひ、マリアンヌに直接掛け合つてやらうと引き受ける。彼女は最初は全然取り合はないのだが、それ處か二人の事を夫に告げて、あんな人を家に寄せつけない様にして欲しいと迄云ふのだけれど、快活で機智縦横で、魅惑的なオクターブと話し合つて居る間に、何時の間にか彼女の内にはオクターブを好もしく思ふ心が湧いて来る。その戀の下心が、夫クラウチオの激しい嫉妬に對して反抗的に燃え上り、今度は自分から進んでオクターブと戀の火遊びをやつて見やうと云ふ氣まぐれを起すのである。

ミュッセが物語詩「ナムア」の題銘に誌した様

「女ミ云ふものは諸君の影の様なもので後を追つかければ逃けるし、こちらが逃げれば爲にのみ心を碎くのではあるが、女は女で一途にセリオを嫌ふのである。貴方のお友達なら誰でも良いのよ。私はただ相手が欲しいんだわ。選擇は貴方にお任せするけれど、ただセリオだけは。ミ、さうして彼女は夜の夜の嬌曳の眼じるしとしてショールをオクターブに與へる。彼は女の心が誰に向いて居るかを充分に知つては居るが、友を裏切るには餘りに誠實である。彼はセリオに其のショールを與へる。美しい夜だ。お月様が昇りかけて居る。マリアンヌはたつた獨りで、それに戸口が半分開けてある。おいセリオよ、幸はせ者だよお前は。」

然し夫のクラウチオは早くも其を嗅ぎつけて數人の刺客を庭に潜ませた。其は知らぬ戀に呆けたセリオは、いそいそと女の窓の下へ急ぐのである。そして「マリアンヌ！マリアンヌ！」と呼ぶ。女は窓に姿を現はして叫ぶ。「オクターブ！オクターブ！お逃げ、お逃げ。貴方は私の手紙を見なかつたの。家のまはりには刺客に圍まれて居ます。セリオの絶望は二倍である。自分は友に裏切られたのか。よし、さらば彼の代りになつて死んでやらう。裏切者よ。俺の血が貴様の上に天罰を下す様に。オクターブの駆けつけた時は既に遅かつた。セリオは我から進んで刺客の手に倒れて行く。

最後の場は墓地である。オクターブはマリアンヌが身も心も投げ出して彼を慰め様とするにも關はらず、愛する友の墓石に縋つて、痛

ましい悲歎にくれ、やがてベスビヤス山麓の自由で快活な生活に、ナポリの町その女達に、森の樹陰の永い食事に、戀に友情に、最後の別離を告げて立ち去つて行くのであつた。この戯曲はミュッセの數へし二十四の時の作であるが、其處には様様の暗示を含み、作品全體は五月の若葉の如く新鮮である。さて佛蘭西の多くの批評家の言葉に従へば、この作中のセリオ、オクターブの全く對蹠的な二人は作者ミュッセの性格の兩面を現はしたものと考へられて居る。これはミュッセ自身も認める處であるらしく、彼がジョルジュ・サンドに送つた手紙に「貴女は覺えておいででせうか。何時か誰かが貴女に、私はセリオだらうか、夫もオクターブだらうか尋ねた時貴女は双方ともだと思ふに答へたミ、私に話された事を。私は貴女に私のオクターブの方面だけしかお見せしなかつた事を心に咎めて居ります。」と書いて居る。

ミュッセの傳記を繙いた人は、また彼の自叙傳にも云ふべき「世紀の兒の告白」を讀んだ人は誰でも知つて居る様に、彼の内には全く正反對な二つの性格があつた。一方は優しくて、敏感で、才智に富み、物事に熱心で悟り早く、真心から出た事には、ほんの僅かな事にでも直ぐ泣き出す程純真で、また實に小兒の如く無邪氣である。然るに一方の彼はミ云ふミ、臆病なくせに傲慢で、横暴で、卑屈で、冷酷で、執拗でまるで惡魔に憑かれた男みたいで、また恐しく利己的で、凡ゆるものを罵倒して止まず、善と同様に惡の中にも無我夢中になる男である。この全然反對な性格がミ云うにもならない迄に入り組み、こんがらがつ

て、彼の一生を甚だ悲劇的な、同時に困憊した病的なものたらしめたのである。

今セリオを取つて考へて見るに、彼は飽くまでも純真な、氣の弱い、常に夢ばかりを追つて居る、同時に我が身の弱點をよく知り抜いて居る青年である。他の女の爲に生きて居るよりは、マリアンヌの爲に死ぬ方がよつぽ容易だ。君達のは戀ではない、暇つぶしだ。僕のは生命を掛けての戀だのに。おう友よ、僕の様に愛する事はどんな事だか、君には永久に解るまいよ。ああ、戰國の時代に生れて居たらなあ。マリアンヌの旗指物を捧けて、其を僕の血で彩る事が出来たらなあ。胃し、戦ふべき競争者があつたなら。僕の生命を犠牲にする事が彼女の役に立つてくれたなら。」

「若い身空で望みのない戀に身を焦す男は何ぞ不幸だらう。幻の行き着く先も、さりとて其から何時覺めるやらも解らずに、甘い夢に溺れて行く男は何ぞ不幸だらう。かくて現實に眼が醒めた時には、彼は既に憧れの國からも、旅立つた岸邊からも遙か遠い處に漂ふて、行く途を辿る事も、引き返へす事もかなはないのである。」さればマリアンヌが彼を愛しないこと知つた時には、彼には死があるばかりであつた。

一方オクターブはミ云ふミ、長いドミノを着込んで頬紅をつけ、四六時中酒に酔はらつて、ふらりふらり暮らして居る、まるで操り人形である。然しその敏捷はエスプリ、快活な哄笑、識り抜いた戀の手練、手管。或る時は「貴方は頼もなければ匂ひもない。まるでベングルの薔薇の様だ。」ミ云つてマリアンヌを怒らしたり、また或時は自ら彼女の足を留め

しめ、そのすばらしい才智にぐんぐん女
心を掴んで行く。けれども彼は、女の心が自
分に向いて居るのを知つて居ても、其を利用
して友を裏切る様な卑劣な男ではなかつた。
自分が破産するより、他人の金を失くする方
が餘つ程辛い云ふ青年である。彼は自分の
放蕩無頼の生活の醜い事も、然し乍ら其を何
うしやうも無い事を知つて居る。同時にセリ
オの純真さを誰よりも身にしみて感動して居
るのである。されば自分の心盡しが仇となり、
セリオが刺客の手に倒れるや、セリオの墓前
に來て歎く彼の言葉は哀切を極めて居る。
「この世の中で俺だけが彼を知つて居た。俺
だけには、彼の物靜かな生活も不思議ではな
かつた。俺達と一緒に過した永い夜は、乾き切
つた砂漠の中のアジスの様に新鮮だつた。
セリオは俺自身の善良な分身だつた。それだ
のにセリオと一緒に天国へ行つてしまつた。
あいつは今時の青年ではなかつた。色んな遊
び事を知り乍ら、其よりも孤獨を選んだのだ。
夢さ云ふものはざれ位欺かれ易いものである
かを知り乍ら、然も現實より夢を愛したので
ある。彼だけが身を以て愛する事が出来たの
だ。俺なんぞは、やくざな放蕩者にすぎない。
女を見ても崇める氣には一向なれず、俺に取
つては戀愛なんぞは束の間の夢の陶醉にすぎ
ない。俺の陽氣さ加減は道化役者の假面さな
がらだ。心はこつくに老いこんで居るのだ。俺
は卑怯者だ。友達の復讐も出来ないのだ。」今
は彼にすつかり打ち込んだマリアンヌが、そ
の愛を求めた時、「マリアンヌさん、私は貴女
を愛しては居りません。貴方を愛したのはセ
リオでした。」これがオクターブの答だつた。

この幕切の最後の言葉は、作中でも別けて優
れたものとして推奨されて居る。
まことにオクターブに取つては眞實の戀は不
可能であつたであらう。一つの事に執着し得
ない、氣力なきオクターブ。心の寂しさを哄
笑と機智と酒に紛らすオクターブ。それ故に
こそ、彼は一層にセリオを愛し、敬したので
あつた。然し乍ら、この自らの弱點を知りつ
つも、何の施す策も有し得ぬ性格は、彼をし
て更に第二第三の過ちを犯さしめ、セリオの
如き痛ましい犠牲の數をこれからも産んで
は行かないであらうか。犠牲は更に大きく、
悔恨はそれ故に一層に切なく。
ミュッセの生涯も實に此の如くであつた。純
眞ではあつても力なき彼、一種の太しさを
有ち乍ら同じく氣力なき彼、この二つの
完格が混り合ひ、融け合つて、或る時は一は
他を厭ひ、或る時は他は一を慕ひ求めて常に
不均整なる、畸形なる人格を作り上げたので
ある。然も強い意志と、明確なる理智の光を
缺いた彼は、この相反する二つのものを激し
く闘はす事によつて調和ある、力強い、豊か
な大詩人たる事も出来ずに、疲勞と困憊を重
ねつつその痛ましい短い生涯を閉ぢたのであ
つた。
アンドレ・ブルトンはその著「浪漫派戯曲」
に於て、この作のセリオを通じてミュッセの
哲學たる彼の孤獨感を指摘して居る。この孤
獨感彼の次の作「ファンタジオ」(一八三四)
に於て一層明確に現はれるのであるが、今こ
れに就て慌しい考察を巡らせば、ミュッセは
人間の心さ云ふものはお互に永久に閉ざされ
たもので、吾人相互の人格さ云ふものは互に

開く事の出来ない秘密である。人間は如何に
自分を現はさうと望んでも、その全部を遺憾
なく現はす事を本當は慾しないものだ。その
流す涙も眞の涙ではなく、言葉は常に思想を
裏切つて居る。人間の魂は此の如く孤獨であ
る。そして人は、他人を永久に疑はねばなら
ない様に運命づけられて居る。さう云ふ風
に考へて居たのであつた。セリオの言葉を借
りれば「僕は行ふ事は知つて居るけれど、口
に出しては云ふ事が出来ないのだ。僕の舌は
心の何の助けにもならず、牢獄の中の啞者の
様に、思ひを打ち開ける事もならず僕は死
んで行くのだ。」彼は友なるオクターブを信頼
し乍らも、自分は裏切られはしまいかさ常に
惧むのであつた。その上彼は老いたる母の物
語によつて、今は亡き彼の父もオクターブと
同じ役を演じて、オルシニ云ふ親友の戀
を彼女に取次ぐ間に、何時か女の愛に絆され
て遂に友人を裏切る様になつてしまひ、オル
シニは絶望の極、自刃して果てたいさつを
知るに至る。セリオがオルシニの役割を襲は
ないとは誰が保證しやう。果して彼の最後は
悲劇であつた。彼は眞實の友の心さへ此を疑
ひつつ死んで行つたのである。
何物をも信じ得ない、この孤獨感十九世紀
の凡ゆる詩人達が様様の形に於て有つた處の
ものであるが、然し乍らミュッセは常に醒め
たる心の内に此の孤獨感を有して居たであら
うか。彼は他人を永久に疑ひ續け得るだけの
明確なる理智の光と、執拗なる意志の力を有
して居たであらうか。青春時代の彼は、一の
戀に破れた時は更に新しい戀を求める事に依
てその苦みを忘れんとし、また戀する氣力を

失つた晩年は、人生の幸福は愛する事に非ず
して愛した事に在る云つて追憶の内に生き
たのではなかつたか。成る程彼は永久に理解
し得ざる人の心に深い恐怖と、疑惑を抱いて
居たには相違なかつた。その故に彼は、眞實
の内にも尙偽のみを見たのである。同時にこ
の何物をも信じ得ない心は、彼に在つては、
何物をも信じ易い心ではなかつたか。私はそ
の點、ミュッセに對して深い同情を感じて居
る。我等は此の原因を何處に求むべきであら
うか。これをミュッセの純真さに求むる事は
可能ではあらうが、然し私は、此を冷酷なる
理智、惡魔と對談し得べき激しき情熱と、豊富
なる想像力の不足に基く彼のデュアリズムの
不徹底に求めたいと思ふ。常に醒めたる孤獨
感には骨を噛む如き悔恨の伴ふを常とする。
彼は少年時代より、我が身につきまゝ彼の
分身なる黒き影、孤獨をその詩「極月の夜」に
於て歌つて居る。然し我等はその中に、ボオ
の「大鴉」乃至は「影」に見るが如き、幽魂より
も尙一層無氣味なる、氷の如く冷たい眼を決
して見る事が出来ないものである。其處に在る
は甘美なる自己陶醉に過ぎない。
さはれ「時として泣きにしここの、現し世の
わが身に殘る善さ云はまし。」と歌へる彼。私
は屢屢苦むだ。私は時として過もした。然し
私は愛した。「ミ友なる、戀人なるジョルジュ。
サントに書き送つた彼。そして「たさへ器は
少くも余は余の盃もて飲まん。」と昂然と叫
んだ彼。私はアルフレッド・ド・ミュッセの内
に、「青春の詩人」としての、佛蘭西浪漫派中
最も清純なる詩人としての永久に朽ちざる姿
を眺めたいと思ふ。
(一九二七・五・二九)

學 內 報

本學專任教員團

の記念事業計劃

本年は本學昇格滿五周年に相當する上に、今回大運動場、本館等の竣工を見、且つ圖書館も新に竣工されんまつあるの隆盛を示してゐるのを機とし、本學專任教員數氏發起の下に、本學創立五周年記念事業が計劃され、その基金を全學教員の寄附に求めつつある。因にこれら發起者諸氏に依つて各教員間に配付された主意書の全文は左の通りである。

拜啓初夏新緑の候愈御清康奉欣賀候。陳ば本學昇格以來既に五星霜その間大運動場並に本館の竣工は今や偉容を呈し更に圖書館の起工を觀るに至り候事誠に御同慶の至りに存じ候。是全く經營者各位諸賢の甚大なる御盡力の賜として洵に感激の外無之候。職を本學に奉ずるものこの機會に於て記念事業として何等かの微衷を表し度吾等僥越ながらこの事業を企圖いたし候に就ては各位諸君の深甚なる御同情を得て本學の向上發展に對し更に一段の光彩を添へ度存居候時節柄誠に乍御迷惑何卒左記事項御承知の上御贊助を得度懇願仕候。敬具

昭和二年五月

發起者 小泉 幸 治

佐 佐 穆

中村 鄭次郎

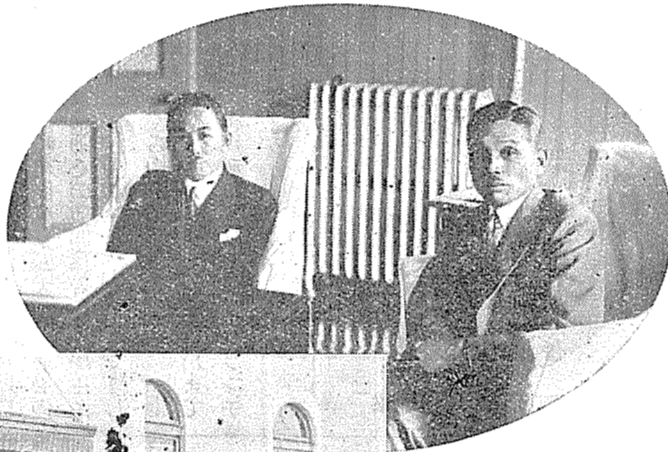
櫻 井 匡

岩 崎 卯 一

河村 信 一

本學創立寄附申込並拂込方法

一、寄附金は素より一定の標準を以て強ふべき次第のものに御座なく候へども便宜の爲め御一名につき二口以上とし御賛成



の各位は右世話方へ御申込被成下度

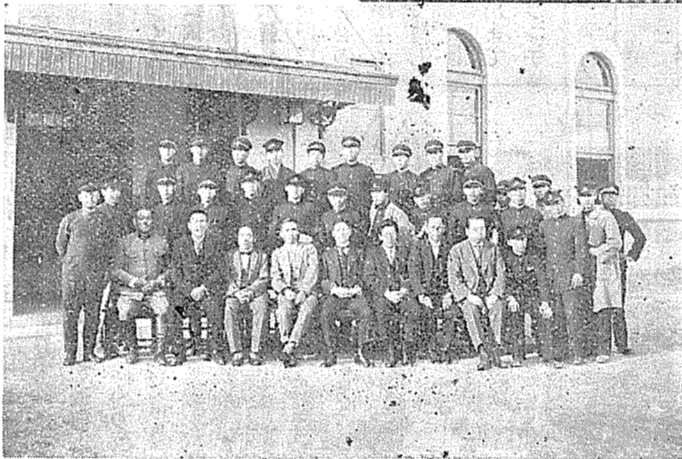
二、寄附金一口を五圓とするは今度の事業が是非共全各位の協力を期する主意に外ならず候

三、寄附金申込は建築工事漸次進捗の折柄成るべく至急御申込又は御取纏め被成下度願上候

關西大學新聞學會發會式

先般創立せられた關西大學新聞學會では其後佐々教授を會長に擧げ學生増子一己君委員として種種會の進展を圖つて來たが、此度愈諸般の準備なり、大阪毎日新聞主筆高石貞五郎、大阪朝日新聞計畫部長大江素天兩氏を迎へて去る五月十六日午後三時から千里山學舎本館大講堂に於て發會式を行つた。

定刻音樂部員の學歌合奏あり増子君開會を宣し次いで會長佐々教授は一場の挨拶を兼ねて高石、大江兩氏を紹介した。高石氏は悠揚迫らぬ態度で新聞の科學的研究の必要なる所以を力説して本會の創立を祝福し、



新新聞學會發會式紀念影(下)當日
(上)講大(右)高石(左)兩氏(上)

大江氏は豊富な記者生活の經驗から新聞研究の問題や困難を諧謔を交へ約一時間に亘つて説明し聴衆に多大の感動を與へた。閉式後來賓を加へて會員一同本館入口にて記念の撮影をなし、更に會員約三十名は別室にて茶話會を開き今後の研究方針につき種種協議するところがあつた。

因に本誌前號に依り、本學に新聞學會が創立せられたことを知つた本學校友根津菊治郎氏(大一五專商)は左の如き稿を寄せてこれを禮讃して居られる。尙ほ同氏は大阪朝日新聞金澤通信局勤務中の人である。

新聞學會禮讃

校 友 根津 菊治 郎

關西大學に新聞學會が生れたまきいて大發見をしたやうな力強い喜びが湧いた。二十世紀の文化は確かに新聞文化である、イギリスの文明批評家エッチ・ジョー・ウエルズは學校書籍として新聞は世界文化の將來を支配する三つの力であると言ひ、すでに現今では新聞の發達程度は一國の文化の程度を表はす同意語となつた。

新聞は近世社會の生んだ自然の產物でありかつて、オスカー・ワイルドが「一人の大統領は四年間支配するに過ぎぬのにジャーナリズムは永久にしかもより強力に支配する」といへるごとき、疑ひもなく、現代の社會生活の上に一大勢力を以て臨んでゐる。

隨つてその報道の効果が精神的物質的に影響するところ絶大なるは言ふを俟たない。それ故に新聞は、廿世紀の若くはそれ以後の文化を知りまたは研究せんとするには、善かれ惡

しかれ、看過するこゝのできない文化機關である。

かかる重大意義を社會に有する新聞紙を學術的研究の對象物とせずして單にその機能のみを觀察するときは過去における寺院政治、帝王專政時代の暴虐の歴史を繰返して「民衆のため」の立憲政治を墮落せしめ、國家の合理的進化を阻害するものである。

然るに翻つて過去を眺めるに今日までの二三世紀間は新聞紙の準備時代といふべく科學的考察は等閑視されてゐた、今やデモクラシーと共に世界の聲となつたジャーナリズムは長い間の啓蒙時代を脱して嚴肅なる建設的時代への一轉機にあるのだ。

歐米各國の大學、高等專門學校では夙から新聞紙の本質研究に留意し正科目にして學的研究をなしつつあり、我國においても最近これが一社會科學としての存在を認め新聞研究所、新聞學院等專門的研究所から大學、專門學校等における新聞學會の設立を見るに至つた。

このときわが關西大學にも「新聞學會」の誕生を見るにいたつたことはまことに時代に適應した研究機關といふべく聲を大にして禮讃する所以である、やがて自由の學園關西大學が綜合大學に完成されんことを新聞學科が正科目として重要なデパートをなすのも遠い夢ではあるまい。

近世文化の魔物——ジャーナリズムの本體（本質）が眞面目なる學徒の研究によつて解剖

されるのを思ふべき盡きぬ興味が湧いてくる。
—二・五・二〇—

教授村上喜貞氏の出發

既報、シベリア經由で歐洲視察の途につく筈であつた本學教授村上喜貞氏は、都合に依つて豫定を變更して海路を選ぶことになり、愈去月二十六日正午神戸出帆の箱根丸で出發した。當日同氏は京都仕立の臨港列車で神戸に向つたが、午前九時半同列車が大阪驛通過の際は、本學教授講師その他關係者並に學生多數が驛頭に出迎へ、健康を祈る聲を以て暫し大阪に別れを告ぐる同氏を見送つた。尚ほ教職員及び學生中の有志は更に神戸まで車を同じうし、神戸税關の好意に依りランチ

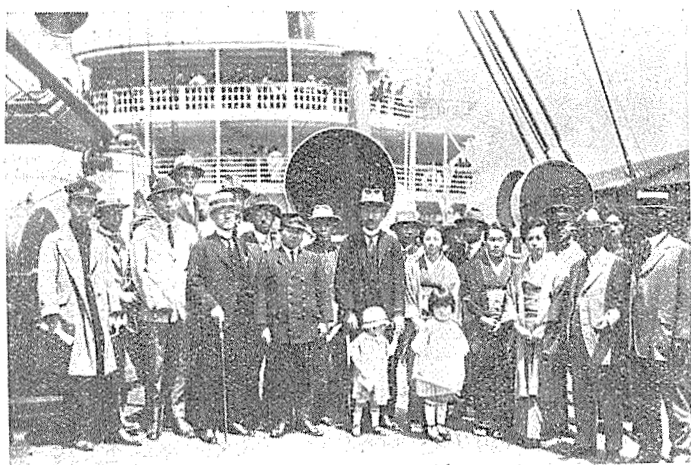


氏一關長市更大るせ講來

に便乗して、神戸港外に出づるまで本船に隨行して別れを惜しんだ。この機會に同教授の健康を祈るに共に、多大の收穫を得て無事歸朝されんことを期待して已まぬ。

大阪市長關一氏の來講

大阪市長關一氏は去月三十日本學千里山學舎を訪ひ、午前十一時より本館講堂に於て學生に一場の講演を試みた。定刻前市長は數氏に自働車にて來學、クラブ・ハウスに小憩の後村上教授渡歐記念撮影（箱根丸甲板にて）



會場に入り會つて氏の講述に列せし宮島專務理事の紹介に依つて壇上に立つた。氏は現に大阪市の市長として繁劇な市政に執筆してゐるが流石以前は學界の人たりし面目を見せて『市營事業』なる題下に市營事業と地方財政との關係並びに企業としての市營事業の得失を知名學者の所説等を参照しつつ時餘に互つて縷縷講述大いに聽者を啓發するところがあった。斯くて氏が割るるが如き拍手裡に降壇するや、宮島專務理事は立つて情味溢るる謝

辭を述べ聽者の心に深き感銘を與へた。滿場の聽衆は終始靜肅に謹聴し教職員の聽講者も多く頗る盛會であつた。因に講演後市長は宮島專務理事の先導にて學内の諸設備を參觀し再びクラブ・ハウスに小憩の後午後一時本學を辭去した。

本學軍事教官の更迭

元本學軍事教官、陸軍歩兵大佐横卷茂雄氏は過般朝鮮大邱第八十聯隊長に轉任し、その後任として第四師團司令部附陸軍歩兵中佐、高橋爲一郎氏が來任した。

因に横卷大佐轉任のこゝ決定するや、去月十九日夕、北濱灘萬に於て本學教職員有志の、次で翌二十日夕、天神橋筋六丁目新京阪ビルディング七階に於て本學學生有志の、何れも送別會が開かれ盛況を極めた。尚ほ同氏は同月二十二日午後八時半大阪驛發の列車で、新任地に赴任したが、驛頭は本學教職員及び學生並に在阪陸軍關係將校等の多數の見送人であつた。萬歲聲裡に出發した。

學級委員の任命式

去る五月二十日正午より千里山學舎本館講堂に於て昭和二年度學部及び大學豫科學級委員の任命式が行はれた。定刻宮島專務理事始め專任各教員、學級委員一同出席、宮島專務理事は一場の訓示の後辭令を交附し、經濟學科第三學年委員壺田君委員一同を代表して答辭を述べ式を終へた。尚ほ式後壺田君の提案にて學級委員會設立の議起り近く具體化する模様である。因に今回任命せられた學級委員の氏名左の如くである。

法文學部

法律學科第三學年

宮田平三

同 第二學年

菊田慶太郎

同 第一學年

北原元茂

經濟學部

經濟學科第三學年

寺下勇

同 第二學年

藤田日出夫

同 第一學年

西崎作太郎

同 經濟學科第三學年

壺田倫夫

同 第二學年

黑柳章

同 第一學年

伊藤祐一

同 經濟學科第二學年

永井勝志

同 商業學科第三學年

中井三之助

同 第二學年

若藤一雄

同 第一學年

中津政雄

同 商業學科第二學年

中村光楠

同 經濟學科第一學年

森井惣吉

同 大學豫科

島田信一

第一學年A組

魚住良藏

同 B組

白川智

同 C組

長澤健一

同 D組

奧野英

同 E組

吉田一郎

同 F組

河野覺壽

學友會委員任命式

去る六月三日正午、千里山學舍本館講堂に於て本年度千里山學友會委員の任命式が行はれた。定刻委員一同出席、宮島副會長よりそれぞれ辭令を交付せられ、後副會長の告示、委員代表の答辭があつて式を閉じた。因に任命せられた委員の氏名左の如くである。

辯論部

(法二) 清水政秀

同 雜誌部

(豫三) 白川惠宣

同 相撲部

(豫三) 黒柳章

同 劍道部

(法二) 木下尙武

同 柔道及びボクシング部

(法二) 小角太一郎

同 野球部

(法二) 壺田倫夫

同 ア式蹴球部

(法二) 藪下益治

同 ラ式蹴球部

(法二) 岩男森雄

同 馬術及び射撃部

(豫二) 佐藤辰夫

同 庭球部

(豫二) 小柳豐

同 水泳部

(豫二) 服部實

同 陸上競技部

(豫二) 淺川文雄

同 庭球部

(豫二) 奧村正一

運動部選手宣誓式

去る五月十八日午後三時から千里山學舍本館講堂に於て千里山學友會運動部選手宣誓式が行はれた。定刻學友會副會長、運動各部部長、委員、選手一同出席、松崎學生監開式を宣し、宮島學友會副會長の告示があつて、各選手宣誓をなした。後運動部委員を代表して小角相撲部委員、各部長を代表して小泉相撲部長よりそれぞれ一場の挨拶あり、校歌を合唱して式を閉じた。

庭球部

(法二) 赤司憲二

同 水泳部

(豫二) 藤本武一

同 陸上競技部

(豫二) 高橋政一

同 庭球部

(豫二) 福原菊次郎

同 水泳部

(豫二) 伊集院賢

同 陸上競技部

(經一) 門脇治郎

本學本館竣工式・圖書館起工式並昇格五周年記念式舉行

本月五日は大學令に依る關西大學創設以來滿五周年に相當するので、恰も竣工せる本館の竣工式、及び新に建築工事に着手することになつた圖書館の起工式を兼ねて、同日午前十時から千里山學舍に於て記念式典を舉行した。

定刻松本學長その他關係者、校友諸氏、その他來賓並に學生一同參列、先づ折柄の小雨

附屬第二商業學校彙報

を侵して學庭の敷地に於て神式に依り圖書館の起工式を終り、本館講堂に入つて他の二式典を行ふ。即ち學歌合唱裡に開式し、松本學長は式辭として現在に至るまでの本學の歴史を説いて、將來に向つての抱負を述べ、山岡倭氏から工事方面に關する報告があり、次で本館建築物の寄贈者である住友合資會社の理事小倉正恒氏は同社を代表して祝詞を朗讀せられ、再び學歌合唱裡に十一時半閉式した。尚ほ當日午後一時から昇格五周年記念文藝大會が開催せられ、音樂、邦語及び獨佛語演説、獨語對話、佛語對話、佛語劇(下手な英語通辯、英語劇(ハムレット)等、何れも學生諸君に依つて演出せられ盛況を極めて薄暮漸く閉會した。但しこれらの詳細は次號に於て更めて報道することとする。

教諭新任 今回左記諸氏を頭書の學課擔任教諭として新任した。

第二學年商事要項 上田徳五郎氏

同 英語會話 渡邊寛一氏

同 英語會話 柳延胤氏

第一學年商業簿記 商學士 赤澤新氏

同 英語會話 本校同窓會本年度春季總會は

去る五月二十九日午後一時より本講堂に於て催された。新舊卒業生多數出席、木下主事、

松本生徒監、岩尾、神保兩教諭も參會した。定刻委員矢谷君開會の辭を述べ、木下主事の挨拶、松本生徒監の學校近狀の報告、岩尾教諭の所感あり、一同茶菓を喫しつつ餘興や歡談に興を盡し薄暮和氣霽靄裡に散會した。

校友の面影

▲辯護士 吉長 正好氏▼

本學推薦校友

夙に東京に於て法律評論に筆をこり近くは大阪に於て月刊雜誌『民衆の法律』を主裁發行し、筆の人として大阪法曹界に知られてゐる氏を訪れた。氏は温顔に微笑を湛えながら、時事評論に、感想に、その風格の一端を漏らして筆者の間に答えられた。特に氏はその恩師故舊に就て語るまゝの厚きものがあつた。

漏らさるる片言隻句に詞懷豊かなるこゝが窺はれ、冗語を聞かむとするも得ざるまゝであつた。壯年の人に見易き圭角は現はれず、而も老年の人に見難き熱意が自ら溢れてゐた。氏はその持論として常に民衆の法律的智識啓蒙の主張をされてゐるがその語らるる所に聞けば、

「法律の民衆化と言ふ言葉は寧ろ言ひ足りないと思ひます。法は民衆のものであります。即ち法は民衆の羈絆であつて、人間生活の凡ての行動に就て考へるに悉くこの羈絆に關はりの無いものはありません。私が發行してゐた雜誌の名稱を『民衆の法律』としたこゝも多少さう言つた考慮によつて命名したのでした。今日の民衆の生活はこの法的生活羈絆に對して全く没交渉であるやうにすら見受けられる。その

爲に種種の失敗や、不覺の刑罰損害等を蒙るやうな結果に陥るこゝが多いのであります。このこゝは全く民衆の法的智識が排除してゐる爲で、これ等の不幸から、自覺的に脱するやう民衆を指導して行くこゝは少くも法律的先覺者たちによつて爲されなければならぬ。こゝに考ふるまゝのこゝがあつて

氏は奈良縣山邊郡二階堂村の産、幼時より極めて俊敏、又腕白でもあつた。年十七の頃ひそかに考ふるまゝのこゝがあつて出郷の志を堅くした。元來大和と言ふまゝのこゝはいろいろの小藩に屬してゐたまゝで鹿兒島や長門、土佐等の如く一の大藩によつて統一されないで、或は天領と稱し、或は郡山その他の小藩に分



吉永正好氏の近照

大正十三年より前記『民衆の法律』を發行し、生きた材料について興味深く且つ平易にその法的解釋を試みて、その宿志の一端を果しつゝあつたが事情のため昨年九月より休刊された。然し不日、同様の目的の爲に單行本の形式に依つてその近業の發表を試みられる由である。

割されてゐた。その爲にその地に住まう人物の規模が狭められて、何だか小さくされるやうに氏には考へられた。又一つには地勢の關係上周囲を山に圍繞された一の盆地をなしてゐるやうな關係から、この空を限られた窪地に踞踏してゐるやうで、人間が自ら小さくなり、その視野を狭くされるやうにも感じられ

た。即ち決意を斷行して獨り自己を頼んで大阪に來り尼崎汽船部に入社した。これも主として就學の爲に種種の便宜を與へられ且つ時間の餘裕を充分に與へられるこゝが出来たため所謂苦學にして樂學であつたこゝは氏の言である。大正元年に至り關西大學法律學科に入學し三年の一學期まで就學、その間一年の終には特待生に擧げられたのであつた。三年の一學期末より東京に出て中央大學法律學科に轉入學し大正四年卒業された。東上するまゝ間もなく現本學學長松本照治博士の宅に寄寓し、先生の指導下にあつて専ら商法、民法、民事訴訟法を主として研究し、中央大學卒業後間もなく辯護士試験に登第された。即ち大正六年のこゝであつた。その前年即大正五年の夏頃法律評論社主幹高窪喜一郎氏に招聘されて同誌の評論部、民法、民事訴訟法並に諸法各學説、判例の評論を擔任し大正七年に及んだが、同十月十八日大阪に移り住み、爾來辯護士の職務に従事し今日に及び、傍ら前述の如く、『民衆の法律』發行に従つたこゝもあつた。その間氏が終世忘却し得ざるまゝのこゝとして縷縷述ぶるまゝのこゝのあつたこゝは、中央大學在學中、松本照治先生並にその御家庭の方から蒙つた恩徳についてであつた。

「私が終世忘るるこゝが出来ないのは松本先生の私に示された恩愛と高教の數數であります。もゝ私は通學上からもまた學費の點について言つても尼崎家よりの送金もあり、旁大井町の松本先生の御宅に寄寓して却つて窮屈こそ感じられ、さまで便利且つ愉快な生活が得られやうこゝは考へてゐるませんでしたがかく考へたこゝについてすら今思へば自分の不

識を思つて冷汗を覺ゆるばかりです。

先生は實に圓滿無礙の君子人で、私心なく、且つ度量な方で、その徳は書生僕婢に至るまで感泣しない者はないほどです。私は學者として又人格者として先生の如き天下にその比を知りません。家庭の全員を擧げて親切無二で愛に満ち満ちてゐます。住むこの年餘、私は愉快であり、温かく楽しく、一日として些さかも不足を覺えたことがありませんでした。然も私のこの恩師に對してなして來たことはどうか、性來の腕白、茶目は益壽り手のつけられない程でした。今にして私の宅にゐる書生が、曾つて私が爲して來たやうに腕白且自由自儘を通したならば私は果して如何の感があるだらうかと思へる、今更に先生の度量と春の輝やきの如く温かく和やかな恩愛の深さを思ふばかりです。全く私は實家にあつても斯くまで楽しく且つ自由な生活は出來ないことを考へます。その御恩こそ全く筆墨の盡すところではありません」氏は眼底に露を湛えつつ「先生の爲には私は文字通り生命を捧けても決して惜しくありません」と語られた。

氏は趣味として讀書と執筆をなさることを擧げられたが、その他玉突き、碁等にも相應の蘊蓄を藏してゐられる。氏は最後に、在學中の學生諸君に對して

「専門學を收めんとする人は自發的研究心がなければ嘘である。到底ものにならない私は信じてゐる」と傳へむことを希望された。蓋し體驗から生れた至言であらう。

氏には夫人との間に八歳を頭に三人の子供あり家庭には常に春風が満ち満ちてゐる。氏は尙春秋に富むでゐる。果を結ぶの日は寧ろ今後に期待すべきであらう。俟ち氏の自重加讃を祈つて擲筆する所以である。

校友彙報

校友會大阪支部春季懇親會

校友會大阪支部にては去月二十二日奈良に於て今年度春季懇親會を開催した。當日午前十時上本町六丁目大軌電車に集合、同時半發車、十一時半奈良着、新温泉にて晝食を喫した。

それより奈良市長大國弘吉氏その他同地校友諸氏の幹旋により常には見ることの出來ない鹿寄の催を観る事が出來た。寄せる人の吹奏する喇叭の音を聞いた鹿が、青葉、若草の香にむせるやうな中を飛びながら渦卷のやうに群れ集ふ様は奇觀であつた。彼方の丘、此方の低地、木の影、池の邊、遠く近く喇叭を中心に走せ集まる鹿ならぬはなき有様であつた。與へられた餌を食ひ終れば、又三三五五散じ行くのである。喇叭の音をかくまでよく聞き分けることは一同には少からず奇異に感じられた。

それより一行は春日神社に詣で、案内の人に從つて社殿、寶物、口碑等について委しく聞くところがあつた。暫し憩つた後三月堂に向つた。天平五年聖武天皇の命により良辨僧正が造立したもので奈良最古の伽藍であり、一に金鐘寺又は羅索院と稱し又單に法華堂とも言はれてゐる。三月堂は俗稱の由である。一同は案内の僧に導かれて内陣に入り親しく本尊不空羅觀世音その他の佛像をまの當り拜し、奈良時代美術の粹と呼ばれてゐる數數の寶物について天平の昔しを語る物の香に酔ふばかりであつた。

これより、一行は興福寺に詣でた。午後三時より新温泉に集合し各自入浴を済まし、四時に至り宴に入つた。先づ砂川支部長の挨拶あり、奈良市長大國弘吉氏次いで觀迎の辭を述べられ、學校側より宮島事務理事の關西大學の近況について一場の報告があつた。これより一同は互に胸襟を開いて快談を交へつ、十二分の満を引いた。因に當日は奈良市長大國弘吉氏、奈良地方裁判所長久保田英美氏並に奈良在住校友中島信夫氏、磯田衆三郎氏、兼松謙太郎氏、峰本新太郎氏の御參會を得、且つ種種幹旋の勞を執られたことについて茲に記して深く感謝の意を表する次第である。尙當日出席者は左記の通りである。

出席者 板垣不二男、板野友造、糸島實太郎、稻葉正雄、飯島善之助、飯田清藏、稻垣鐵五郎、萩原隆隆、橋本鹿藏、花井壽藏、本田武藏、富田金三郎、富田貞男、榎本浩藏、岡本義男、岡本重治、箕西大次郎、神田榮吉、神宅賀壽藏、桂忠雄、金井正夫、吉村種藏、吉田音松、吉積文平、垂水善太郎、武森武市、武村英男、高松林之助、瀧本實、田川七郎、辰巳經世、丹二貢、田中藤作、中村鄧次郎、中村秀光、中江濟、中村虎次郎、中務平吉、中村良之助、長岡實、室石常秀、村松岩吉、野島藤次郎、野村吉藏、野口政次郎、黒田莊次郎、山口房五郎、飯下吟次郎、安岡仲稔、松崎義盛、松本標四郎、松川茂三、小泉幸治、後藤田德太郎、榎原治郎、荒川庄次郎、櫻井匡、菊地金次郎、木戸卯之助、清成五六郎、木下孫一、湯原慶太郎、宮島綱男、道端常治郎、三島律夫、篠田栗夫、霜村盛卿、志野覺治郎、新町徳之、廣瀬德藏、目代誠吉、春川太郎、關豊馬、砂川雄峻、平岡啓道、片山義忠、宮崎秀夫、佐々穂、大國弘吉、磯田衆三

耶、兼松謙太郎、中島信夫、久保田英美、峰本太郎の諸氏。(順序不同)

校友會福岡支部春季例會

校友會福岡支部にては去月二十一日午後六時より眺望絶佳北九州に比なしと言はるる延命寺松屋花壇に於て昭和二年春季例會を開催した。會場附近の新緑したたらむばかりに刻に至るや池田重吉氏の會務報告あり、次いで宴に移り、會員各自はそれぞれ青年時代に歸りたる如く十二分の歡を盡した。美妓また酒間を幹旋し興を添ゆること一入なるものがあり、終りに池田氏の音頭にて母校の萬歳を三唱して散會した。時に十時。(池田氏報)

國南會創立總會

過ぐる四月九日天満野田屋に於て大正十四年度本學專門部商業學科卒業業者有志により國南會が組織されその創立總會が開催された。同窓校友相集まり親睦並に社會場裡に於ける互裨益を目的として共同親和の力に依つてこれが有終の美を結ばむことが創立の趣意であつて、直接間接に母校の發展に應援し且つ相互に連絡を保たうとするに出でた由である。同會では當日役員の選舉並に會則の制定等をなしたが、廣く大正十四年度商業學科卒業校友諸子の入會を希望してゐる。因に國南會會則並に創立總會出席會員附同會役員は左記の通りである。

國南會會則

- 第一條 本會ハ國南會ト稱ス
- 第二條 本會ハ大正十四年關西大學商業學科卒業生ヲ以テ組織ス
- 第三條 本會ハ會員相互ノ親睦人格ノ向上及福祉

ノ増進ヲ計ルヲ以テ目的トス

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メニ春期(四月)秋期(十月)各一回定期總會ヲ開催ス但シ必要ト認メタル場合ハ幹事長ハ適宜臨時總會ヲ召集スルコトアル可シ

第五條 本會ハ本部ヲ大阪ニ置ク
第六條 本會ハ左ノ役員ヲ置ク

幹事長 一名
幹事 三名
會計 二名

第七條 役員ノ選舉ハ春期總會ニ於テ之ヲ行フ幹事長ハ役員中ヨリ互選ス

第八條 役員ノ任期ハ一ケ年トス但再選ヲ妨ゲズ前條役員中缺員ヲ生ジタル場合ハ次回ノ總會ニ於テ第七條ノ方法ニ依リテ之ヲ補充シ其ノ任期ハ前任者ノ殘期トス

第九條 役員ハ會務ヲ總括ス

幹事ハ幹事長ヲ補佐シ會務ヲ處理ス
會計ハ會計事務ヲ掌ル

第十條 會費ハ總會ノ部度之ヲ徵集ス

第十一條 會計報告ハ總會毎ニ之ヲナス

第十二條 本則ハ總會ニ於テ出席者ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニ非レバ變更スルコトヲ得ズ

附 則

本會則ハ昭和二年四月九日ヨリ之ヲ施行ス

幹事長松葉德助、幹事嶋井辰夫、同裏野三治、同小林喬、會計岡勇、同茂野富士志、會員稻垣周針、濱口尚、西村治三郎、渡嘉敷唯達、太子清一、山本左一、澤田善次郎、桐野準平、平尾榮の諸氏
尙同會事務所宛名は大阪市東區伏見町二丁目澤野ビルヂング、松葉德助内、圖南會である。

校 友 動 靜

河面三二氏(大一二商) 米國留學中の氏は
近く歸朝の途につかるる由通信があつた。

松田德太郎氏(明二九法) 過般鹿兒島縣學

務部社會課長主事に就任された。

森田仁一氏(大一一三商) 從來高島屋吳服店大阪支店貴金屬部主任として勤務中の氏は
今回郷里津市に歸り父祖の業を繼ぐために
同店を退職された。

花田菊太郎氏(大六法) 去月初旬大阪丹平商會元美粧部主任京都府下伏見町東柳井上茂氏の息女政江嬢と乃木神社に於て華燭の典を舉げられた。

藤岡四郎氏(昭二專法) 豫て在勤中であつた株式會社大林組を先般退社された。
増田金一氏(大二五專經) 和歌山縣海草郡山口村阪和鐵道株式會社山口出張所勤務となつた。

校 友 住 所 移 動

清水榮松(大九法) 三島郡吹田町松ヶ島町一〇九九

若宮虎雄(昭二專商) 石川縣江沼郡山代町宇山代一七〇二五

鈴木一(大一二三商) 橫濱市堀之内町石島三二

岡本政一(昭二專經) 港區市岡町市場通一ノ八

出石熊藏(昭二專法) 中河内郡布施町東足代七六

島崎真雄(昭二專法) 朝鮮咸鏡北道清津府日賀町町九

長岡實(大一一經) 南區鐵谷仲之町六

植月佐章(明三四法) 岡山縣津山町

住田米太郎(大七法) 鳥取縣米子町東間

諸隈元次郎(明三一法) 佐賀市水ヶ江町片田江通

押谷富三(大五法) 北區南森町二九

横田長次郎(大六法) 東區船越町二丁目五四

片山義忠(大三法) 西區堀江通三丁目三三

丸山昔生(明三〇法) 北區眞砂町四々

永石光雄(大一一法) 鹿兒島市西千石町一七

田中茂(昭二專經) 永石法律事務所住吉區住吉町北島一四五八

荒井孫四郎(大五專商) 明石市東仲之町平野岩吉方

藤岡四郎(昭二專法) 東淀川區十三東之町一七〇藤野幸夫方

松島武三郎(昭二專經) 兵庫縣武庫郡今津町宇高潮一三

福美秋芳(昭二專文) 神戸市菅原通二丁目八〇橋本方

松根秀彌(大二法) 神戸市楠町四丁目二五

笠原秀治(大五對法) 北區伊勢町一番地

安川彦夫(明四四商) 兵庫縣武庫郡葦屋字中ノ内

美政治郎(昭二專商) 富山縣上新川郡東岩瀬町永割一〇八

奥田正雄(大一一三商) 神戸市外西灘村畑原一三

石川鶴藏(大四專經) 住吉區鶴合町一九七〇二

市村敏夫(昭二專法) 東京市芝區濱崎町簡易保險局第四區課

高原孝吉(大五專法) 港區四條通四丁目五三須賀野信次方

玉野力(大五專法) 東成區野江町二丁目四六

磯野充賀(大七專法) 富山縣東礪波郡城端町昭和電力會社庄川建設事務所

加賀田慶治(昭二專文) 兵庫縣武庫郡六甲村德井字前田四五八

藤岡四郎(昭二專法) 山口縣玖珂郡南河内村二八三

植村正文(大一二法) 南區間屋町八

尾崎秀治郎(大四專經) 兵庫縣川邊郡小田村今福太田五番地二號畑田方

校 友 逝 去

昭和二年 四月

大阪市東區南本町二丁目三一
元公證人 三 野 莞 爾
(明治三十八年度法律學科卒業)

右訃音に接し謹んで弔意を表す

校 友 内 藤 越 夫 氏 の 近 信

在ベルリンの校友内藤越夫氏から最近本學教授宮島綱男氏宛に來信があつた。左にその大要を摘記する。

(前略)——さる代議士から招待せられ二三日引きつづいて議會の見物に出かけました。議會の圖書館は誠に堂々たるものであります。又政黨の首領に私の保證人になつてくれる人があつて國立圖書館からも自由に借り出しが出来、幸ひ勉強が出来て喜んで居ります。

この圖書館も實に立派で種種と教へられる所が少くありません。隣の若い婦人は何を讀んでゐるのかとひそかに伺ふミグムプロヴィツの國家學説、あなたの婦人はゾムバルトの近代資本主義論までもやり切れませぬ。

私の宅では當地に在る日本の教授十人程招待して學術の講演會を催し、後討論に花が咲き中面白うございました。大阪の研究所(大原社會問題研究所)に做つて出來たさかいフランクフルトの社會問題研究所を訪れた教授があつて、その設備や資料蒐集振等中面白いと聞きました。私も親しく見學するつもりでゐます。

(中略)——教授の寫眞ロツシャ一枚見本としてお送り申上げました。この種のもの外に澤山ござあります。珍本はありますが高くて手のつけやうがありません。マルクス資本論初版一五〇マルク、その他獨佛年誌やノイエ・ツァイトも出てゐます。

(後略)

學生彙報

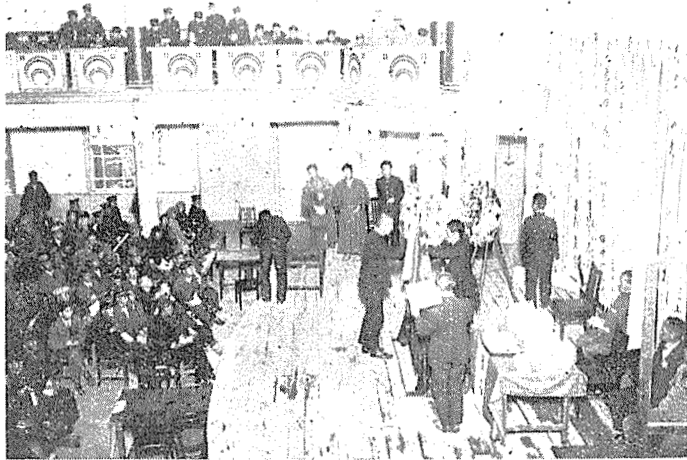
第一回全國中等學校
學生優勝雄辯大會

本學豫科辯論部主催第一回全國中等學校學生優勝雄辯大會は去月十五日午前十時から、大阪時事新報社後援の下に天王寺公會堂に於て開催された。参加校三十九、應援の學生も多く定刻前既に聴衆は堂に満ちてゐた。因に當日のプログラム及び審査の結果は左記の通りであつた。

開會の辭
新學團體運動
現下を直視して
吾人は斯く叫ぶ
社會の一隅より若
き學徒は斯く叫ぶ
國家永遠の理想に
想に想到せよ
現今我國の教育
制度を難す
偉大なり!!雄辯
昭和日本の黎明期
に臨んで吾人青年
の責務を使命
失 題
信仰の偉力と
國家の將來
光は輝く亞細亞の地
現下を直視して
醒めんとする民
衆に信仰を叫ぶ
剛健なる精神
獨立の一步
よりよき瞬間に生きよ
反逆を越えて
自然に還れ土に還れ
若人よ!來りて榮け
昭和日本の殿堂を

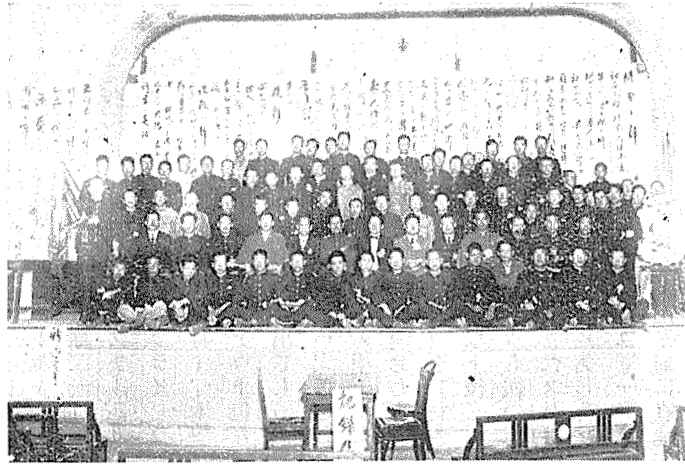
司會者 白川 惠宣
關大豫科 戶根 泰雄君
天王子商業 佐藤雄太郎君
中外商業 戶谷 嘉彦君
漢華商業 井上 保君
天王寺師範 三木多喜治君
北陽商業 山岸要治郎君
伊丹中學 梶井武治君
花園中學 松長金義君
桃山中學 木村 清君
日新商業 增山周海君
市岡中學 高原武男君
高野山中學 上山東洋君
上宮中學 玉岡 馨君
池田師範 弓削 清君
聖峯中學 竹村賢祐君
生野中學 尾見 夏雄君
關甲商業 堅正 一雄君
御影師範 若田 定夫君

民衆發見の第一聲
起て、人種戦の陣頭に
失 題
我が辯論界を見て
全有色民族の爲に
運動の興味
生れ甲斐ある
人ならんには
挨拶
昭和頭を爲さる
べきものこそ亞細
亞民族の團結なり
凡てを征服するも
のは愛あるのみ
海草中學 中井四郎君
成器商業 今井利男君
關大二商 藤原重太郎君
東山中學 松本重美君
福島商業 田中彌一郎君
東寺中學 上田正士君
八尾中學 佐藤忠義君
甲陽中學 中島芳春君
司會者 白川 惠宣君
神戸二中 増田 一夫君
八幡商業 高田 三郎君



小ざき人生をみつ
めて我はかく信ず
る故にかく叫ぶ
童心性の滅落に際して
消え行く者の爲に
姫路師範 三輪 保君
東商業 竹尾大吉君
京都二商 本田忠三郎君

後援の辭
人生は愉快の
パラダイス也
須く自己の尊
さに目醒めよ
大阪時事新報社 堀澤元次氏
神戸商業 中本孝二君
神戸商業 小久保也男君



同上記念撮影
祝はしき現代人の生
活と善人團結の必要
に立脚して
昭春の大地
新生の英雄
細西亞を團結せよ
新希臘の創造
山櫻の價値を認めて
演 奏
優勝者 八幡商業 高田 三郎君 (三四六満點)
二等賞 神港商業 中本孝二君 三四〇
三等賞 神戸商業 小久保也男君 三三六
四等賞 桃山中學 木村 清君
廣陵中學 根川由夫君
谷口數木君
熊田武治郎君
繪本幸雄君
伊藤盛弘君
松村 昇君
關大音樂部一同

五等賞 神戸二中 増田 一夫君
六等賞 關西甲種商業 堅正 一夫君
七等賞 天王寺商業 佐藤勇太郎君
八等賞 甲陽中學 中島芳春君
九等賞 和歌山師範 山口數木君
十等賞 生野中學 尾見 夏雄君
終に本學辯論部長佐々木教授は優賞旗及び優勝メダル、賞品等を授與し、本學並に大阪時事新報社の萬歳を三唱して極めて盛會裡に午後五時閉會した。

大學豫科學外辯論大會

第一回全國中等學校學生優勝雄辯大會に引續き午後六時より豫科辯論部學外辯論大會が開かれた。青野昌平君の開會の辭に續いて左記の如く各辯士はそれぞれ得意の雄辯をふるつた。

「概念性の確保」西田竹雄君、「新時代の教育要求を論ず」嘉根勘治君、「噫この濁流を如何せん」加納憲介、「人類愛に立脚して現代社會制度を論ず」鳴尾芳太郎君、「東洋を救ふものは誰か」越智比古市君、「嗚呼自重せん」貴嶋靜治君、「時が感じしめるもの」矢上德君、「挨拶」白川惠宣君、「黎明の鐘がなる」小山良次君、「フーレタリヤ文化を論ず」中村德藏君、「近代思潮の追求」は獲永橋政一君、「貧民窟釜ヶ崎を論じて現代社會政策を難す」澤田金康君、「カイヨー夫人の獄を讀みて」春原源太郎君、「過去五十年間の我國に於ける社會現象の一考察」三木八郎君、「婦人問題の根本義を論じて近代婦人の覺醒を促す」原良人君、「中外の時局に直而して帝國の使命を論ず」羽淵博君「閉會の辭」高橋政一君。
午後九時半に至り極めて盛會裡に會を閉じた

第二十四回工業見學

去る四月二十五日放課後工業見學團の一行は北長柄帽體製造所に赴いた。當帽體製造所は近時長足の發達をなし専ら海外輸出品の製造に多忙を極めてゐたにも拘らず特に見學を許諾され加之工務員の懇切なる御案内を忝ふしたことは見學團一行の深く感謝するところである。

原毛の整理から順次の工程を経て帽體の出来る有様は面白い程迅速なものである。染色から最後の整形、艶出しに至るまで人工と器械力と相俟つて實に驚歎に値する精巧さである。一同は得る所尠からず、満足の内に退場した。

第十八回皇陵崇敬會例會

昭和第二回、本學劈頭の例會として後醍醐天皇の在しませし日を偲ぶ吉野に行つた。麗らかに晴れた春の最中の四月二十九日、天長節の佳辰を卜して行を催はした。來り會するもの十數名六時五十分上本町六丁目より大軌電車に乗り吉野驛にて下車、徒歩にて吉野川沿岸の風光を賞しつつ先づ官幣大社吉野神宮に詣でた。

藏王堂が吉野山に建立せられたのが櫻花さも亦史蹟さも重大な關係をもつものであり、古より櫻は藏王權現の神木であるこの傳説があつて、この傳説に因んで漸次櫻の獻木者も出來て遂に海内に名高い櫻花の名所となつたと言ふことである。次に後醍醐天皇御還幸ありて、花にねてよしや吉野の吉水の枕の下に石ばしる音さ御製ありし日を偲ぶ吉水神社に參拜した。茲には南朝の古を語る寶物が多く保存され一行は心行くまで拜觀した。その他義

經御座の間、辨慶思案の間並に辨慶の力釘等世に傳はるものが多くあつた。

次に勝手明神に至る。義經鐘掛の松は此の境内にある。それより如意輪寺に詣で、かへらじかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞさむる、さ正行が屏に書きつけた跡を思ひ、感に堪えぬものがあつた。傳へられた寶物の大學豫科學生學外辯論大會記念攝影



大學豫科學生學外辯論大會記念攝影

一つ一つに往きし日の香は漂よひ、遣れる一木一石に在り日の影は纏はる。

次に後醍醐天皇の御英靈永へに神鎮もらせ給ふ塔尾陵に參拜し、後參拜記念影撮をなす。竹林院は延喜十六年の草創であつて後小松天皇より竹林院の名を賜ふたさ傳へられてゐる。豫定通意義ある一日を送り湯川家族館に

て休息をとり、後隨意行動をこつた。因に當日の出席者は左記の通りであつた。

山本順應、入江賢壽、淺見敏郎、齋藤湊、野口茂樹、森井惣吉、平井美水、溝邊文和、築留寛、奥川武郎、湯川政一、木村仁吉、日下吾一、平井の諸氏。

千里山野球部報

對フレズノ野球戰——本學對フレズノ野球戰は去月二十五日午後四時二十分より阪神沿線甲子園球場に於て舉行された。審判天知(球)立石(壘)兩氏、本學先攻にて開始。一回本學二アウト後豊田中堅直球安打スチールす、第二回本學本田第一球を中堅左に直球二壘打し一アウト後小西も中堅に直球安打スチールしたが小西離壘して刺され阪井左翼フライ。フ軍一アウト後岩田遊撃左に直球猛打す、本學元氣凌じくフ軍をして三、四回一アウト後五回二アウト後エラーに各一走者を出さしめたのみ克く守り堅く攻め、大毎運動記者をして「攻守ともに見事の出来で近畿大學チームの粹、殊に本田の好投は觀衆を感嘆せしめた」を批評せしむるに至つた。一方フ軍古林も走者を出さしめず、六回本學二アウト後三木左翼線近く直球二壘打、フ軍吉川少し緩い球を左中間に二壘打し中堅送り古林またスクワイズしてこれを還す、八回本學一アウト後阪井遊撃左を猛ゴロで抜き安打す、フ軍一アウト後錢村遊撃右を直球に抜き吉川左前に直球安打し中堅三振後ダブルスチールしたが本田古林三振、九回本學二アウト後川西中右間安打したが本田二壘ゴロ一對零にて惜敗した。午後五時四十五分開戦、成績左の如し。

寶塚(先)										關大										對寶塚協會野球戰									
二遊左	野小	原玉	28打數	31	2	3安打	5三振	1四死	1機打	2盜壘	1失策	1二打	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
一三右	尾崎	清水	3安打	13	2	5三振	1四死	1機打	2盜壘	1失策	1二打	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中捕	大井	孫村	1四死	2	0	1機打	2盜壘	1失策	1二打	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
捕	大井	孫村	1四死	2	0	1機打	2盜壘	1失策	1二打	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
得點	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
失	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
安	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
打	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
點	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
振	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
球	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
失	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	1	4	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

學生寄稿

最近經濟學界を賑はしてゐるものにブーハリーンの主として限界効用説を批評した「Die Politische Ökonomie des Renneers」がある。

本稿は偶學生諸君の寄稿中に見出された右の書物の第一章の邦譯である。題目が今や斯學界に於て興味を中心になつてゐるものである。寄稿者がさんな人であるか判らないが、兎に角この種のものゝ相當の程度に邦譯し得る程に勝れた語學力を有つてゐる人が若い學生中に在ることを頼母しく思はれる。この等の理由でその一部分をここに掲載することにした。

寄せられた譯稿は第一章「Die methodologischen Grundlagen der Grenzutzentheorie und des Marxismus」の全部であるが、ここには頁數の都合上、その第一節だけを探り、餘は次の機會に譲ることとした。このことを序に寄稿者芳尾君にもお断りして置く。

(編輯者附記)

經濟學に於ける客觀主義と主觀主義

エヌ・ブハーリン
芳尾 一夫 譯

譯者附言。

客觀的實在を分離して理論として存在し得るものではない。若し理論が即自的向自的に獨立權を振ひ得るゝ誰かが主張するゝすれば、それは彼自身の幻想か乃至は意識的にそうしてゐる場合ならば社會的存在にその根據を持つてゐる。何故ならば理論とは生成、發展、滅

亡の過程を過程する客觀的實在の認識の結果に外ならぬから。

「だから生活、實踐の見地が認識論の第一の基礎的見地でないならぬ」、然るに反動主義者一般は常に理論の獨自性を従つて「認識論の基礎的見地」を思惟の中に、觀念の中に求める事の正しさ(美しいかな)を口にする。「學識あり(而も愚なる)哲學教授等は、「純粹科學」の代表者等にとつては不條理」な事には、對象的真理が人間の思惟に到來するか否かの問題は何等理論の問題ではなく、一の實踐的問題である。人間は真理を、即ち彼れの思惟の現實性とか、その此岸性を、實踐において證明せねばならぬ。思惟一實踐から遊離されたる一が現實的なりや非現實的なりやの争ひは、一の純然たるスコラ哲學的問題である。

塊地利學派の方法論がそうしてそれに依つて立つ經濟學説が如何なる意味に於てもその眞理性を云ふを得ないものである事は以下陳述せられてゐる一文がそれを明にする。「その議論の出発點となせる、單獨孤立的な獵夫及び漁夫は、十八世紀の想像力の乏しき幻想に屬する」⁴「乏しき幻想」に支配せられゐる二十世紀の反動經濟學説の本體を主として論理的方面より一だが現實とは緊密に關連しつゝ一曝露する事が此の論文の目的だ。

特に譯者の附言したい事は、語學の智識の不充分より結果する原著者の表示せんとする意義の曲解乃至誤譯の多數に存するであらう事と、それ故にこそ讀者諸君の慈悲に充ちた御教示の彼に與へられるであらう事を彼が特に希願してゐることを云ふ事である。

此の論文はN. Bucharinの露西亞の原著の獨譯Die Politische Ökonomie des Renneers die Marxistische Bibliothek Band II. の第一章 Die methodologischen Grundlagen der

Grenzutzentheorie und der Marxismusの全譯であるが脚註は全部之を略し譯出した。

- 1 唯物論と經驗批判論(邦譯) 二一七頁
- 2 同上 二九八頁
- 3 フォイエルバッハ論(佐野譯) 一六八頁
- 4 經濟學批判「序説の部」(宮川譯) 三頁

- 一、經濟學に於ける客觀主義と主觀主義
- 二、歴史的觀點と非歴史的觀點(この項以下後廻し)
- 三、生産と消費の視角
- 四、結 論

各各の多少秩序的に建設せられた理論は、その部分が確固たる論理的紐帶で結合せられてゐる所の一定の全體を表現せねばならぬ。だから、一ヶの合理的批評は、理論の根柢を、その方法を、不可避的に突かねばならぬ。蓋し、之こそ理論的全體系の個個の部分と結合するものであるから。それ故に吾等は限界効用説の方法論的諸前提一その下に於て吾等は、何等其演繹的性質でなく、寧ろ、抽象的に演繹的な方法の範圍内での、微的諸性質を理解する一の批評を開始する。我等に取つては經濟學の各理論は、それが理論である以上、何等かの抽象的なものである。一その點では、マルキシズムは塊地利學派と充分に合致する。此合致は、だが然し、單なる形式的な種類のものである。それが然し、單なる形式的な種類のものである。それが然し、單なる形式的な種類のものである。それが然し、單なる形式的な種類のものである。

論一般に對立させる事は出来ないだらう。此場合、吾等の關心は、即ち塊地利學派の特徴であつて而もそれをマルキシズムに甚だ峻烈に對立せしめる所の、抽象的方法の具體的內容である。

經濟學は即ち一ヶの社會科學であつて、その前提は一經濟學の理論家達が其を意識してゐやうが、居まいが社會の本質並に其發展法則に關する何等かの觀念である。換言すれば、各經濟學説は、一ヶの社會學的性質を有し、而も社會的生活の經濟的方面がそこから考究せられる所の、一定の諸

前提に依存する。斯る諸前提は判然と言表せられ得るか、そうでない場合は不明瞭の儘であり、こつかり結合せられた體系として述べられ得るか、「さもないれば無規定な見解」の儘である、一だが然し總ての場合にそれは其處に存在するに相違ない。マルクスの經濟學は、史的唯物論なる社會學的學説の中に其に類する基礎を持つてゐる。それに反して塊地利學派は何等完結せられた或ひは多少なりとも正確な社會學的基礎を了解してゐない。で此等の形跡は塊地利學派の經濟學説から第一に建立せられねばならない。其の場合、「國民經濟」の性質に關する一般的な根本的思想と、塊地利學派の經濟學説の事實上の基礎との矛盾に、時時遭遇する。だから吾等は之に吾等の主要目標を向けやう。次ぎの經濟科學の社會學的基礎がマルキシズムの特徴である、個人に對する社會的優越に關する認識、各各の經濟構造の歴史的・一時的性質の認識、及び最後に生産の支配的役割に關する認識。それに反して塊地利學派の特質は、その方法論的個人主義、非歴史的立脚地並に消費からの出發點である。「序論」に於て吾等はマルキシズムと塊地利學派との此等の根本的相違に對して社會一發生的な説明を與えんと試みた。此等の相違又はより正しく言えば此等の對立を吾等は一ヶの社會一心理的對立として特徴付けた。此處ではそれは論理的方面より分析せらるべきである。

一、經濟學に於ける客觀主義と主觀主義
ウエルナー・ゾムバルトは、マルクスの『資本論』の第三卷が刊行せられた時に彼が發表した其の有名な論文で、經濟學の主觀主義的と客觀主義的な二方法を對立させて、マルクス體系を一ヶの「極端な客觀主義」の溢出だとして説明した。それに反して、塊地利學派は彼の見解に依れば「對立的傾向の最も合理的な補成」なのだ。此特徴は吾等の考へては充分に正鵠を得てゐる。事實上、社會的諸現象一般並に特に經濟的なそれ等の研究を二

方法でなし始める事が出来る。第一に認容し得る事は、科學は各々の一定時に於て個人的な經濟生活の現象を規定する一々の全體としての社會の、分析から出發すると言ふ事である。此場合、科學の仕事は、社會的な性質を有する各種の諸現象間に存在してゐて而も個人的な諸現象を規定する所の、諸現象並に合法則性を發見するにある。だが第二に認容し得る事は、社會的諸現象が個人的な諸現象の一定の成果を構成してゐる以上、科學は個人的生活の合法則性の分析から出發せねばならないと言ふ事だ。此場合、科學の仕事は個人的經濟生活の諸現象並に合法則性から、社會的な經濟的諸現象及び合法則性を導出するにある。

此意味で、マルクスは確に一々の『極端な客觀主義者』である、そしてそれは社會學に於ても將又經濟學に於ても同様である。だから、彼の根本的經濟學說——價值に關する學說——は、古典派のそれ、殊にアダム・スミスのそれとは峻別せられねばならぬ。アダム・スミスの労働價值説は、消費せられた労働の量と質に應じて行はれる財の或る個人的評價に基いてゐる。其は一々の主觀主義的労働價值説である。反對に、マルクスの價值説は、客觀的な、即ち社會的な價值法則であり、從つて其學說は一々の客觀主義的労働價值説であり、其は何等かの個人的な價值評價に決して依據するものでなく、寧ろ諸諸の一定の社會的生產力と市場に於て規定せらるる商品價格との關連のみ、表明してゐる。價值説と價格説の例に依つて、ゾムバルトは、兩者の方法の相違を甚だ著しく示してゐる。

『マルクスも亦單に——ゾムバルトは言ふ——交換する個人の個人的動機を究明したり、或ひは又生産費用の計算から出發すると言ふ事を思考しなかつたらしい。否彼の思考道行はこうなのである。價格は競争に依つて構成せられ而もその儘で變らない。だが競争は競争で、利潤率に依つて、利潤率は剩餘價值率に依つて、後者は併しそれ自體一々の

社會的に條件付けられた事實、社會的生產力の表明たる價值に依つて、各々支配せられてゐる。さて、其は體系に於ては、反對的な順序で表現せられる。價值——剩餘價值——競争——價格等。吾等において一々の標語を持ちたいならば、マルクスに於ては、經濟主體の個人的な意志の動機が問題なのでなく、寧ろ常に其の限定が問題なのだ。主觀主義的學派は正反對である。此場合一般に（個人的な）經濟的行為の『動機作用』が體系の中心點に現はれてゐる。』

此相違は甚だ的確に高揚せられてゐる。事實、マルクスは『社會的運動を人間の意志、意識及び目的から獨立してゐるばかりでなく、寧ろ反對に其意欲、意識及び目的を規定法則に導く所の一々の自然史的過程として觀察してゐるけれども』、ボエム・パウエルクの分析の出發點は經濟的な主體の個人的意識である。

『其討究が國民經濟學の仕事である所の社會的諸法則は——ボエムは記述してゐる——個人の合致的行為に依據してゐる。行為上の合致は、亦行為を導く合致的動機的作用の一の成果である。斯る事情に於ては、個人の行為が導く起動的動機に迄、社會的諸法則の説明は遡及し、そしてそれ等からその出發點を得なければならぬと言ふ事に關する疑問は容易に成立し得ない。』そして斯くの如く客觀主義的方法と主觀主義的なそれとの對立は、社會的方法と個人主義的なそれとの對立以外の何物でもない。だが上述せる二方法の定義はヨリ大なる完成を必要とする。就中マルクスに於て論ぜられてゐる人間の意志、意識及び目的からの獨立性が更に強調せられねばならぬ。第二に地學派の出發點を構成する折の『經濟主體』も亦、ヨリ深く規定せられねばならぬ。『……此等の一定の社會的關係は、毛布、亞麻布等と同様に、人間の生産物である。然しそうかと言つて、マルクスに於て論ぜられてゐる社會的成果、あの『生産物』が目的

乃至は起動的動機として主體の意識の中に包含せられてゐる言ふ事には決してならない。無政府的に建立せられた近代社會は——經濟學の學說は此社會をこそ其研究の對象とする——市場の主要な活動力（競争、價格の動搖、取引所等）を伴ひとしてゐるが、それは、『社會的生產物』が其創造主を支配する言ふ事、更に個人的（だが分離してゐない）經濟主體の動機の結果が此動機に相應しないばかりでなく寧ろ其に甚だ廣く露骨に對立するに至る言ふ事を認容するための多數の例證を提供する。之は價格構成の例に依る最もよく明瞭になる。購買者と販賣者の幾人かが市場に現はれて、彼等自身の商品並に他のそれ等の一定の（概略的な）價值評價をする。彼等の闘争の結果として、契約締結者達の優越的多數の個人的評價と決して一致しない一定の市場價格が成立する。更に又、構成せられた價格は『經濟主體』の一の系列に直ちに破壞的に作用し得る、と言ふのは低度の價格は彼等を騙つて其の企業家として行為を模倣せしめるから。彼等は『破壞』せられるのである。取引所の『冒險遊び』こそが基礎を置いてゐる株式市場に於て、此現象は更にヨリ明晰に現出する。近代社會——經濟的組織に取つて典型的な總ての斯る場合に有つて、人間の意志、意識及び目的からの社會的諸現象の『獨立性』に就て云々する事は出来るが、此獨立性は、相互に完全に獨立してゐる二現象を問題としてゐるかの如くに解釋せらるべきでは決してない。人間の歴史が、人間の意志に依つてではなく、寧ろ此意志の外部にあつて作られる（斯る『一々の物理的歴史觀』はマルキシズムのブルジョア的ボンチ語である）考へるのは笑止千萬である。事實は其の正反對だ。二つの現象系列——個人的行為と社會的諸現象——は最も緊密な程度で、發生的に相互に結合してゐる。此獨立性は事ら個人の行為の客觀的に成立した成果が個個の其各部分を支配すると言ふ意味に於て、解釋

せられるべきである。『生産物』が其『創造主』を支配するのであるが、其場合各々の或る時に於ける個人的意志は、個個の『經濟主體』の意志關係の既成に構成せられた合意力に依つて規定せられる。競争に於て征服せられた企業家、或ひは破産せる金融家は、活動的の巨人として、結局は彼等自身に背を向けた所の社會的過程の『創造主』として、以前は出現した言へ今では止むを得ず、闘争場を明渡されねばならない。此現象は、商品經濟の限界内に於ける經濟的過程の不合理性、『主要な』性質の表明であるのだが、それはマルクスに依つて初めて發見せられそして華々しくも分析せられた商品拜物教の心理となつて甚だ明白に表はれる。商品經濟に於てこそ、人間間の關係の『事物化』過程が生ずるのであるが、その場合、發展の主要性質のために此『物的表現』は或る特殊な、此存在のみを生來する合法則性に從つてゐる所の、特別な獨立的存在をなす。

それ故に、吾等は個人的諸現象の各種の系列とそれ等から成立する社會的性質の一系列とを持つ。此兩範圍（個人的と社會的）のみならず同一範圍の各種の系列間、特に相互に依據する社會的諸現象の各種の系列間に於て、一定の合法則性が確かに存在してゐる。マルクスの方法こそは、各種の社會的諸現象間に存する諸關係の合法則性を規定する事に存するのである。換言すれば、マルクスは各種の個別意志の成果の合法則性を検討したが、個別意志としての此等自身を考究しなかつた。彼は社會的諸現象の合法則性を探究したが、その時に彼は其等の個人的意識の諸現象に對する關係を放棄してゐる。

吾等は、今や、ボエム・パウエルクの『經濟主體』に轉向しやう。カール・メンガーの著書（諸研究等）に就ての其論文に於て、ボエム・パウエルクは地學派の辯護反對者並にメンガー自身共鳴して、新傾向の辯護

者の「經濟主體」とは社會の原子以外の何物でもないと言ふ事を認めてゐる。新學派の仕事は……社會科學に於ける理論的研究の支配的方法としての歴史的並に有機的方法の廢棄……精密な原子論的傾向の再用である。(傍點著者)

此場合、其隣人との社會的關連に於ける一定社會の個個の構成分子ではなく寧ろ分離せられた「原子」、經濟的ロビンソンが分析の出發點となつてゐる。ボエム・パウエルクが其見解の説明のために選んだ諸の例證も亦それに相應してゐる。「或る男が其好む飲料水の豊富に溢出する水源を所有してゐる」斯様に「ボエム・パウエルクは彼の價值説に關する分析を始めてゐる。斯くて彼は、荒原の旅人、全世界から分離せられた農夫「其丸太小屋が原始林に淋しく位してゐる所の」移住民等を持つて来る。其に似た諸諸の例に吾等はカール・メンガーに於て遭遇する「原始林の居住民」「沃地の住民」「孤島上の未來なき唯一人」「分離して經濟を營む田舎者」等。

吾等は、此場合同一の立脚點が、以前の根柢が總ての經營者に取つて極めて快くも甚だ注意深く公式化せられてゐるのを見出す。其「經濟的調和」に於て彼は記述してゐる。「經濟的諸法則は、それが多數人の全體を問題としてゐるやうが或ひは二人の個人のみを、將又、諸事情のために分離して生活せねばならないであらう唯一人を、問題としてゐるやうに同一様式で作用する。個人が或る時間を通じて唯一人で生活し得るならば、其人は同時に資本家であり企業家であり労働者であり生産者であり而も消費者である。全部の經濟的發展が其人自身に於て行はれてゐる譯だ。彼が其の各々の構成部分を、即ち、欲求、努力、満足、自由な使用と、勞働を要する効用を、觀察し得るだらう事に於て、彼は其最も單純な形式に於ては言へ全機體に關する或る概念を自ら構成し得るであらう。」

其前に、「私は、經濟學が其目的を達し其使命を完うするのは、それが次ぎの事を、個個の人間に就て正しい事は總て社會に就ても亦正しいと言ふ事を定義的に明示した時に於てであらう」と主張した。

ジェボンスも亦全く同一の事を言つてゐる。「經濟學の諸法則の一般的形式は個個人にばかりでなく全民族にも亦適當する。」

此觀點が甚だしく古く聖的であつても其は絕對的に誤つてゐる。社會とは(意識的に又は無意識に考へられてゐる様に)何等、分離した個人の算術的合計ではなく。其反對に各々の個人の經濟的活動は、個個の經濟的社會的關連が其の表現を見出す所の或る一定の社會的環境を前提としてゐる。分離して生活してゐる人間の動機は「社會的存在」「政治的動機」のそれとは完全に異つてゐる。前者は自然、其原始的清淨狀態にある事物のみ環境として持つてゐる、後者が環境として持つてゐるの「物質」ばかりでなく寧ろ又特殊な社會的周圍である。分離せる人間より社會への轉移が可能なのは社會的環境を通じてのみである。そして事實上、其等の間に存する何等かの接觸點を除外してしまつて、單純に個別經濟の合計を問題とするならば、ロッドベルツが巧みに「經濟的共同社會」と命名せる所の特殊な境遇がないならば、各社會も亦存しないであらう。勿論孤立分離せる經濟の合計を或る一致せる概念に概括し、それを或る「全體性」の中に謂はば無理に押し込む事は、理論的には充分出來得る。だが、然し此「全體性」は、相互に緊密に結合せられそして不斷の交互作用の中に位してゐる經濟の一體系たる社會とは、全然違つた或るものである。第一の場合に於ける關連は吾々自らが構成してゐるけれども、第二の場合にはそれは事實上に於て存在してゐる。だから個個の經濟主體は或る社會的經濟體系の構成分子としてのみ觀察せられ得るが、分離して存

在する「原子」としては觀察せられ得ない。經濟主體は其行動に於て社會的諸現象の或る狀態に適應する。後者が彼の個人的動機に制限を加へる、或ひはゾムバルトの言を借りて言へば、それを「制約する」。此事は「經濟的社會の構造」即ち生産關係にばかりでなく、寧ろ又或る既與の構造の基礎の上に成立する社會經濟的諸現象にも適當する。斯くて例へば個人的價值評價は常に既に構成せられてゐる價格に適應する。或る銀行に資本を投資せんとする努力は當時の利率に依存してゐる。甲又は乙の産業部門への資本の投下は該産業部分が齎す利潤に依つて規定せられる。或る地面の價值評價はその地代と利率等に依存する。勿論、個人的な諸動機が「反對的作用」を振ふ。が然し、其等自らが既にそれ以前に早くも社會的な内容を所有してゐると言ふ事は強調せられなければならない。従つて、分離せる主體の動機から何等「社會的法則」を導き出す事は出來ぬ。吾等はだが併し、吾等の考究に當つて分離せる個人から出發せず、寧ろ其動機の中に社會的な要素が存在するものと前提しやう、然る時吾等は巨大にして不完全な圓の中に落ち入るであらう。吾等は「個人的」即ち「主觀的」から、「社會的」即ち「客觀的」を導出しやうと思ふ、だが事實上は吾等は其を社會的から導出するのだがその事は種種の人人に「無駄足を運ぶのだ」と稱せられてゐる。

吾等が右の記事で知つた様に、分離せる個人の動機が地地利學派(ボエム・パウエルク)の出發點である。勿論吾等は、其辯護者達の勞作に於て、社會的全體に就ての多少正しい諸諸の觀察にも亦出席する。だがそれは、各々の社會的關連を抽象して、等しく經濟を營む主體の動機の分析を以つて其研究を事實上開始してゐる。それに類する觀點はブルジョアジーの新理論家に取つて正に特徴をなすものであり、而も、此觀點こそ地地利學派をその全構造に於て論理的に支へてゐる。されば、其が

何等かの社會的な諸現象の原因を求めんと試みるや、それは「社會原子」の個人的動機の中に「社會的」を不可避的に密輸入せねばならないと言ふ事が明かになる。此場合それはだが、不可避的に巨大にして不完全な圓の中に落ち入るであらう。そして實際、此不可避的な論理的缺點は、地地利學派の主觀的價值説の、其辯護者が大いに誇りし全理論的建物の礎石の、分析に於て早くも姿を現はす。其の間、此缺點のみが、早くも近代ブルジョアリーの、多大な吹奏曲に伴はれて建立せられた科學的な經濟的イデオロギーの有する意義を破壊する。「何故ならば」ボエム・パウエルク自身が正しくも記述してゐる様に「説明せらるべきものが科學的檢討に於て無視せられるならば、それは一ケの方法的極惡罪であるから。」

斯くて、吾等は、地地利學派の「主觀主義」「經濟主體」の目的的分離化、社會的諸關連の放棄が不可避的に全體系の論理的破産に導かれなければならないと言ふ結論に到達する。此體系が殆んど全く充分でないのは、唯徒に魔法を施された圓の中を循環した古い生産費説と恰も同様である。經濟生活を理論的に把握し、個人的動機の合法則性が規定せられる事はさて置き、その合法則性を決定する事は一般に可能なりや?換言すれば、マルクスの理論の基礎をなす「客觀主義」は可能なりや、の問題が自然生成する。

此問題はボエム・パウエルクに依つてすら肯定せられてゐる。「……更に、合法則的動機作用のない法則的行為はないが、適當なる動機作用を意識せざる合法的行為の認識は存在する!」にも拘らず、ボエムは、「認識の客觀主義的源泉が……最もいい場合で全部の到達し得る認識の正に貧弱な同時に向自的に全く不十分な一部分のみを授け得ると言ふ事を認めてゐる。蓋し吾等は經濟の分野に於ては主として意識的な、打算的な人間の諸行

山岡總理事と千里山學報

——同志創刊五周年に際して——

關西大學學報局主任 辰 巳 經 世

本誌五周年記念號を發刊するに當つて、別項所掲の通り各方面から多くの感想文を寄せて頂いたことは、私に取つて何よりも喜びである。それにも掲らず私には尙ほ一つの大きな淋しさがある。千里山學報を恰も愛兒の如く、愛孫の如く、否なそれ以上にすら愛育して下さつた、又現に爾からされつつある本學總理事山岡順太郎氏の——本誌が創刊以來ここに五周年を迎へるさいふ事實を、誰よりも最も深く喜んで下さるであらうさころの、從つて誰よりも感慨深く幾多の御感想を陳べて下さるであらうさころの——その山岡老先生の御感想を本誌に掲げ得なかつたことである。

本誌締切直前、私は出来るならば、否な是非共、先生に親しくお目にかかつて、種種の御感想を承り、それをその儘掲載させて頂きたいと思つて居つた。五周年記念號發行のプログラムを齎すことだけで、先生の温顔に漾ふであらう微笑を想像して、お目にかかることそのことを大きな楽しみとして居つた。だが何さいふ遺憾なことであらう。先生には折悪しく病床に臥して居られること承つた。一兩日中に轉地療養のため北陸黒部の狭谷へ旅立たれること承つた。かかる際に少しでも先生をお煩はせすることはよくあるまいこと承つた。かくて私の楽しみは少くもこの際單なる喜びの豫想に過ぎなかつたのである。諦めなければならぬことになつたのである。

千里山學報が兎にも角にも今日まで發行を繼續して來ることができたのは、勿論非常に多くの人人の直接又は間接の庇護と誘導の賜に外ならない、校友各位並に學生諸君の支持なしには、繼續發行は少くも非常に困難であつた筈である。教職員その他關係者各位の指導と援護なしには、恐らく些しの發展も望み得なかつたであらう。この意味に於て私共編輯の事に當る者に少しの功績を歸せらるることすら全く過賞である。私共はこれらの人人に依つて指示される道をただ平凡に歩んで來たに過ぎない。寧ろ私共の無能無力が、以上に發展してゐなければならなかつた筈の千里山學報を、現に在るが如き狀態にしか達せしめ得なかつたことに對する責を痛感せざるを得ない。

これら數多くの支持者、誘導者、鞭撻者各位の中、就中千里山學報の存する限り、凡ゆる意味に於て忘れてはならない人、否なさうしても忘れ得ない人、それは實に山岡順太郎氏である。本誌が呱呱の聲を擧げたその當初から、經營編輯の大綱より體裁内容の限まで、一一周到綿密なる示教を與へられたのは同先生である。折に觸れ有益なる所感を本誌に發表せられて、一入精彩を添へられたは勿論、月月發行期日が近づく毎に『學報は未だ出來ぬか』と學報局に關係ある者の顔さへ見れば千秋の思ひで新しい號の出來を待ち兼ねてゐる氣持を示され、『今度はどんなものが出るか』以前以て内容一般を聞かれては、本誌の内容の幾分でも充實して行く有様に心からの喜びを表されるのは同先生である。從つて先生のこの氣持が、私共の上に反映せずには置かない。少しでも良いものを一日でも早くお目にかけたいとの願望が、自然私共を驅つて編輯、校正、發行までの全過程に精進せしめた。新しい號の印刷が終るや否や、人を三有社（本誌の印刷所）に走らせて幾分か取寄せ、これを先生の許に届けるのが、月月の私共の愉快な義務であつた、又現にさうである。

表紙の題號『千里山學報』の五字が同先生の筆に成ることは何人も知らるる通りである。創刊二周年を記念するさやかな會合が開かれた時であつたかと思ふ『學報の體裁内容等は追進歩して來たが、題號を示す文字だけは然依舊態を保つてゐる。これも全體的發展に伴つて何かしななければならぬのではないか』といふやうな意味のことを先生が言はれた。然し私共の恣意な願から、この文字の有つ歴史的殊特性を惜しむの餘り、寧ろその儘にして置いて頂くことにした。それ以後更に三年を経過する。幸に本誌が尙ほ十年二十年と繼續發行せらるるならば、年月を経れば経るほきこの文字の歴史的意義が加はり、これを見る者の感慨を益深からしめるものがある。この意味に於て本誌にして存續する限り、同じこの文字が何時までも俱に在つて欲しいといふことが私共の切なる望みである。恐らくは先生にも諒して下さるであらう。

先生の自邸の應接室には常に幾部かの千里山學報の備付が缺かされないこと承る。そして來訪者ある毎に先生自らこれを客に示し、これを

を通じて本學の狀況につき種種吹聴することを楽しみにして居られること承る。先生が本學の發展に就て常に心を碎かれつつあることは言ふまでもない、そして本誌に對するかくも顯著なる關心は、大學そのものに對する關心がかくの如き形を取つて具象されてゐることも言へやう。本記念號の印刷が終る頃、先生は或は尙ほ御歸阪になられぬかも知れぬ、從つて黒部の轉地先で見て頂くことになるかも知れぬ。幸に一日も早く全快歸邸せられ、親しく種種の御批評を承ることは私共の最も切望することである。

千里山學報の繼續發展に關する直接の最も大なる功績は、誰よりも先づ本學事務理事、教授宮島綱男氏に歸せられなければならぬ。氏は寧ろ學報局同人の主位に立たれ、經營編輯の一切につき私共を督されつつある。材料の提供、掲載種目の嚴選、形式の整備から、用字校正の末梢に至るまで、毎號氏の周到なる注意の及ばぬ限はない。無能無力の私共を以てして、兎にも角にも仕事が続けられて行くのは、全く本誌に對する氏の全面的御努力の賜であること、この機會に特に高調して置きたい。

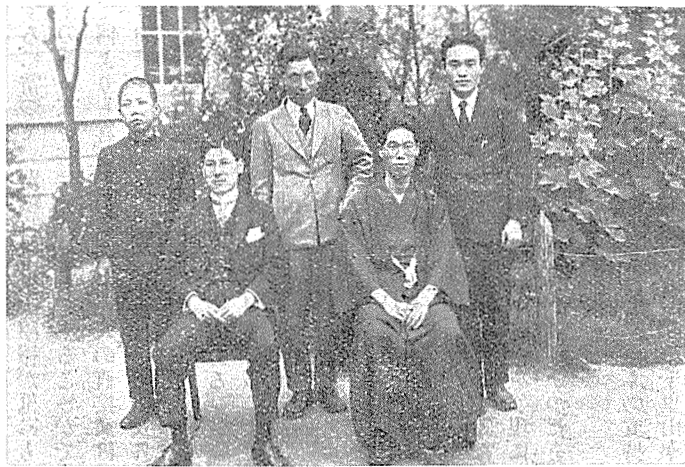
本誌と共に忘れられてはならない人に舊教授服部嘉香氏がある。氏は今では本學の人にあらず、東京に歸つて文筆、著述の生活に精進して居られるが、詩人であり、文學者である氏が搖籃時代の本誌に對して盡されたお力は到底簡單な章句では表し切れぬ。今回五周年記念號發行の報を齎すや、氏は隨文を寄せて本誌を昔の戀人になぞらへて居られる。本誌又心あらば、どんなにか深く、然し密に氏を懷しんでゐるであらう。

千里山學報創刊五周年所感

感想(學報を中心として)

講師 今山 實

私が此の學園に關係したのは一昨年の十一月であつたと思ふ、千里山の裸木が寒風に泣く時であつた、學報局の辰巳先生には前に二三度お目にかかつた筈であるがシミジミあの頭の毛を拜觀する光榮を有する様になつたのは私が時時學報局に顔を出し初めてからであつた、何といふお行儀の悪い頭の毛なんだ、長髪が紛然雜然と何等の統制もなく何等の自制もなく入り亂れて居る、先生は毛を別けて居るのかそれともオール、バックなのか判断が付かない、それでも御本人がオール、バックの積りらしいのだから物凄、長身疲軀の能辯家である、霜村先生は白面の貴公子にして詩人である、だが顎骨が發達してゐる處を見るに爭鬪性は多少お持ち合せだらうと思ふ、唯温厚の資がその爭鬪性を押へて居るのではなからうか、恰度休火山の様なものである、森川先生の愛嬌があつて色



關西大學學報局同人

の黒いのはお母様が懷胎中筆筒の上の惠美須様の像を取らうとして誤つて硯箱をひつくり返したからである、經濟學を熱心に御研鑽の様である。

是等の先生方の日夜の努力に因つて生れるのが學報である、實際斯様な仕事は意匠と計數的知識がありそして面倒臭さを厭はぬ資質がなければならぬと思ふ、その點に關しては先生方の努力は眞に偉きべきものがある。

私が初めて學報に筆を染めたのは宮島先生が「何か書いて見ろ」と仰つたに律る、「初めてチョークを執りて」言ふ一文を學報に載せて頂いたが半にしてチョン切られた、後半が矯激に失したからである、一體何處の學校の雜誌でもチャンネル綴ちてあるものだが關西大學のは獨り己に御承知の通り綴込みでない、此方が遙かに洒脱だと思ふ、表紙にも申分はない、恐らく何處の學校のそれより優つて居るだらうと思ふ、

内容に關しては初めて讀ませられた時は「堅苦しいなあ」と感じた、中頃は「仕様がなにかいなあ」と思ふ様になつた、今ではモウ諦らめて「斯様なものかいなあ」と決めて居る、が一ツ慾を言へばもう少し親睦會であるミクラス會であるミカの記事を單に報告に止めずその席上の言論出來事等を面白く書き下して載せて貰ひたひものである、それは何の事はない幹事に書かして報告する事にしたらよい筈だ、斯様云ふ記事はクラスを異にしたものの間の親和を計るに都合の好いものだミ私は思ふ、學報局の諸子以て如何、紙數が増えるから駄目だよ言はれればそれまでではあるが。

記事の良否に到つては私如き淺學非才の者の嘴を入れるべき限りでない。編輯は整美である、これは上記三先生の不斷の努力の賜であらう、私は學報の現在を知つて過去を知らない、學報が如何なる徑路を辿つて今日迄發達したか無識である、從つて今昔の感なき起りそうな筈がない、そしてまた今後學報が如何なる方向に如何に發展して行くかも知らない、だが斯様な事は云へる、關西大學が年を追ふてその外延ミ内包ミを擴充しつつあるのを見ればそれに伴ふて學報が益進暢し、そして當局者の責務は愈重大になるだらうミ、要するに私も學報を祝福するもの一人なのである。

昨夢是非

元教授 服部嘉香

『千里山學報』五周年記念號に何か書けとの御

下命を受け、感慨無量。『學報』はわたくしの昔の戀人であつた。

古い戀を語るのには、清少納言あたりだミ、うるさしミかわびしミかで片づけてしまふことだらうが、今は、あまり正直に書いては、沒書にされるおそれもある。古い戀は、やはり心に秘めて、いつまでも自分だけがなつかしんでゐればよいのかも知れん。

しかし、『學報』の名ミ共に思ひ出すのは、山岡順太郎氏、宮島綱男君、辰巳經世君、森川太郎君。是非共に忘れかねるミさばかりである。

學生に對しては、學者の良心ミ熱情ミ母性的愛ミを以て臨んだミ信する、わたくしの在職中、焼える熱情を、いつも抑へかねては抑へて來たのは『學報』に對してであつた。この戀人を自分で愛するミいふ外に教育してみたいミ、いつも深く感じてゐながら、何かミそれは妨けられてゐた。戀ミしては却つて愉快だつたかも知れないけれども、なつかしくもまた淋しい心残りもある。

今は人の妻ミしての『學報』が、すつかり長火鉢に向う側に、板についた姿を見せてゐるのは、是でもあり、非でもある。

『學報』の編輯監督ミいふやうなミを、頼まれはしたものの、監督は出來なかつた。筆寫をしたり、校正をしたり。

學術的論文を載せるミを山岡氏から熱望され、諸教授の筆に成つたものを順次掲載したが、或空氣からは、それが變な言葉で迎へられたりしたために、少くミもわたくし自身は、自分の研究なり、感想なりを『學報』には出さないミ決心した。それを表面に見せるミことも

出来ず、ぐづぐづして、辰巳君を困らせたこと数ヶ月に及んだこともあった。

二

謎ばかり書いてゐても仕方がない。『學報』は結局わたくしのものだといふ心持もある。人の妻であることは辛い、關西大學では、コンスピキアスであることの危険さ不愉快のため、戀人を捨ててわたくしの方から家出をしたのだ。誰を恨まう。

うれしいのは『學報』の毎號に見る關西大學の發展である。さすがに宮島君である云つて感心をしてゐる。いつかは、形の上ばかりでなく、精神的に、眞の大學意識に目ざめて来る日もあらう。それが楽しみである。

うれしいのは、わたくしの教へた人人の卒業である。東京へも、二月に一人ぐらゐる割合で、昔の人が訪ねてくれる。職業を世話して上げたのが二人、金のお世話をしたのが三人、あゝはわたくしの無能から、ぐづぐづおつき合ひをしてゐるだけであるが、それでもうれしい。

優等卒業などあるのを見るに、第二商業の級主任ださあるのを見るに、大學や専門部の先生になつたさあるのを見るに、いつもわたくしの心は躍る。

それも、もう二三年で、教へた人の種切れになるかと思ふに淋しい。

三

わたくしは、大正十四年四月末、再び東京に住む入して歸つてから、今日までに著書を九冊、講義録原稿一種を脱稿して食つて来た。今年中にいふ約束のもの、教科書四冊に他の著書四冊、その内十冊は教科書だから、

勞苦は一通りでない。貧乏にも徹底して、今は却つてそれを樂しむ境涯にある。もし時間と金を得たならば、千里山の運動場や本館を見に行きたく、學報局のなつかしい一隅にも顔を出してみたい。人の妻である『學報』によつて、いろいろの消息を知る喜びから、その夫である人、その樂しさうな家庭をも改めて親しく訪ねて見たいといふ欲望をそそられる。會へば却つて辛いのかも知れない。けれども會ひたいのが至情である。

さうぞ、昔はわたくしの戀人であつた『學報』を、大事にしてやつて下さい。

○緋牡丹の大きく咲いてあちら向き

千里山學報の月

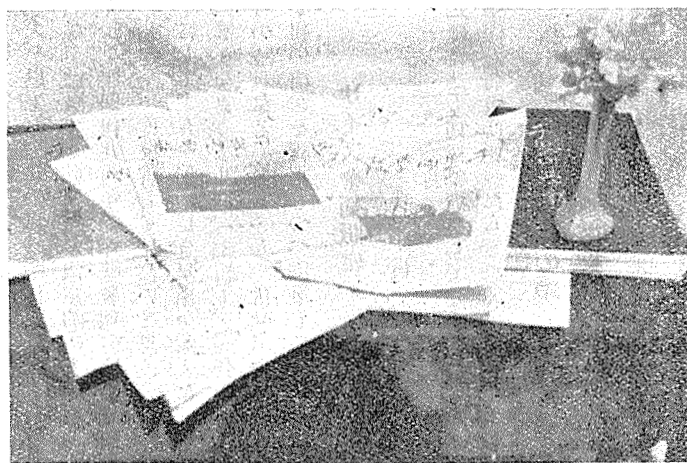
の發行を喜んで

專法三 多久和良三郎

千里山學報創刊五周年を機として、卑才を顧みず千里山學報に關する卑見を述べたいと思ひます。形式内容共高尚にして充實せる千里山學報を月々頒與せらるることを學生として何よりも幸福に思ひます。諸先生の有益な論説に加ふるに、詩歌寫眞等趣味益兩方面共遺憾なく、而も益それらの内容が豊富になりつつあるのは誠に喜しい次第です。ただ強ひて希望を陳べるならば、千里山學報は誌型が大きすぎて携帶保存等に多少の不便を感じますから、普通の雜誌型に改正されては如何でせう、但しこれは小生一個の考へで參考までに申し上げるに過ぎません。若しそのために却つて學報の外觀を損するやうでは如何かとも思はれます。

千里山學報が更に益發展することを祈ります

と同時に、この機會に、學友會から「關西論叢」が發行されてゐるが、千里山學報と共に今少し發行回数を増加してほしいと存じます。尚ほ若し出来るならば理想的な講義録の如きものが發行せられ、筆記に忙殺されてゐる學生一同に、明確な知識を徹底的に授けて頂ければ切望します。



唯感謝するのみ

校友 古市賢太郎

千里山學報の現状に對しては唯感謝するのみです。學門に官學私學の區別はない筈、それに世人は何故動もするにその間に大きな區別を認めやうとするのでせう。世人は私學を輕

視する理由として財政困難、内容貧弱、校舍狹隘等を挙げます。殊に母校關西大學は、今日まで否な現に、餘り世人に知られて居らず、餘り重要視されてゐないのは遺憾ながら事實です。然し一度この千里山學報を見せるに忽ち驚異の目を見張ります。價千金！萬金！に豪語したい。世人が自分の考の間違つてゐたことを悟る時の痛快さ。これ故に私は千里山學報に唯感謝するのです。

私は大正十一年恰も千里山學報の創刊と同時に、關西大學に入學したので、同誌は創刊號より揃へて有つて居ります。自分で學報綴りを作り毎號綴込んで、私の一生涯を通じて集める考へてゐます。ここに拙い寫眞ですが、今まで集めた全部の千里山學報を撮つたのを送します。(第三段挿入)

感想 一片

校友 後藤武夫

我が『千里山學報』が創刊五周年記念號を出すから感想を書けといふことである。

關西大學は私の母校であり、校友である私が『千里山學報』に親みをもつことは改めて申すまでもないのである。従つて同學報に對する思出や、所謂感想等も尠なくないのであるが、今は唯其の即感一片を書き綴ることにする。

我が『千里山學報』の使命は、解釋する人によつて一様ではあるまいが、私の信する所によれば、大凡二つの方面に岐るるやうである。

即ち其の一は關西大學のそのものの機關誌であるから學事其他の報告用であり、又關西大學文化の宣傳に任すべきものである。而して其二はこの學報によつて學生並に校友其他の職

員を通じ、一種の精神的脈管たるべきものである。現在の學報を一瞥しても直ちに斯うした感想が浮び、大學に關係を有する者は、誰しも云ひ知れぬ懐かしみと親みを有するであらうことを信ずるのである。我が『千里山學報』が斯うした使命を有し、斯うした目的の下に發行せらるるごすれば、より多く其の内容を充實し、記事を精鍊して欲しいものである。多數の校友が學報を通じてヨリ多く母校に親みを持つことになれば、愛學の觀念は油然而生してここに起り、其の精神的接觸は一層緊密なるであらう。愛校の觀念を擴充したものが愛國の精神であり、結局國民一致、共存共榮の理想は斯くして徹底するに至るのである。

五周年記念號の發刊を祝す

校 友 江 頭 勝 美

ここに千里山學報五周年記念號發刊に際して飾らざる真情の吐露をお許し下さい。わが關西大學が年に月に隆盛に赴きうつあるを欣ぶその反面に、一の寂寥を覺えしめたのはわが大學に機關雜誌のないことでありました。これに對する私共の希望が私の敬愛する友人辰巳氏に依つて企てられた時、私共は先づ千里山學報の創刊を祝し、その健なる成長を希ひ、親友の雄圖の完成を祈りました。然し又正直なところ千里山學報の前途多難を非常に憂へたのであります。がそれは一の取越苦勞に過ぎませんでした。即ち五ヶ年間の雨雪に能く堪えて今日の如く大なる發展をなしたのは關係者各位の援助に俟つゝ雖も學報局當局の奮闘殊に辰巳氏の經營その宜しきを得

たる賜であるご信じます。尙ほ經濟に關する論説を常に掲げて下さつて私共を啓發して下さいますことを感謝して居ります。ここに五周年記念號の發刊を祝しますと同時に將來益大なる發展をお祈りする次第であります。

千里山學報に對する感想

校 友 水 本 信 夫

問ひ質さるるままに、貧しい過去に於ける自分の體驗に訴へ、千里山學報に對する所感を述べて見たい。凡そ定期刊行物の經營は、其の經營方法を誤つて自滅するものが随分ある。而も夫は多く經濟的基礎の上に、浮沈を決定する。従つて先づ此の大ポイントに、主宰者の眼目が集中さるるのも、宜なることである。試に世の大衆相手の、文藝、娛樂、趣味、學術に關するもの等々の起伏は、多く大うではあるまいか。幸にして豫定のグループを基調とする學報とか、會報に類した定期刊行物は、其の經濟的基礎が、收支の前に豫想し得るから、投機的、營利的に走らなくて済む。勢宣傳とか販路の往來に、激烈な競争も少く、自然地味を逐ふて行く。かるが故に學報乃至は會報に類した定期ものの需要が、豫定の圏外に逸走して、紙價を高めることは、稀な現象であるから、寧ろ本來の目的精神が、何の程度迄克明になつて居るか、其の足跡の大小を以て、進歩の成績を觀察するを相當とするであらう。確かに千里山學報の創刊號を拜見したのは、自分が法律評論の編輯時代でした、多少出版の情勢に通じかけて居た自分は、當初から頁數、發

行數の増大、收益の多額等を希待するより、學報編成の目的型相に、内容の取材が、果して何う變化するであらうご待望した。惟ふに他に専門の學發表誌を持たぬ關西大學の立場が、此の學報に代用的な重要を置かねばならぬ苦境を察し、せめても其の學園圈内のものとしては異數のものであることを認むるに吝でないが、學園の歴史規模、今日の如き盛大を以てして其の對外關係に於ける地位と名譽を誇負する此學報が決定的のものであらうかを、創刊五週年紀念號發刊の機に、同志と共に今一度反省して見たいと思ふ。幸にして、五ヶ年の長き星霜を耐えた、本誌の健在を喜ぶと共に、編輯上、經營上、主宰者の隠れた苦心を多し、併せて尙多端なる學報の前途を祝福しつつ擲筆しやう。

サイズを菊版に

評議員 下 村 海 南

私は雜誌も切抜整理をしてゐますが、千里山學報も菊版に願へたらと思ふて居ります。

『千里山學報』の現状に關する感想

講 師 新 町 德 之

私の何時も思ふことは『千里山學報』を讀むたびに素朴的原始的なでも形容すべき一種の新鮮味を感じることです。それは恰も昨日今日の千里山の學園の青葉若葉で埋みつくされて生氣にあふれハチ切れそうな潑刺さの満たされたる雰圍氣にある青葉若葉そのもののやうな瑞瑤しい學徒に接した時の感觸と同じだらうと思ひます。『千里山學報』の現状

は新鮮味そのものだ。何か知ら生氣があり潑刺さがある。目に若葉山杜鵑初鰓といったやうな、春の花、秋の紅葉にも見出し得ない底のフレッシュなチャームを持つてゐると思ふ。千里山學園の強みも『千里山學報』の意氣も茲にある。そして此新鮮味は二つの態様を以て表現されてゐるらしく私には思はれる。それは取りも直さず新鮮味の國際化と實際化とであります。そして私の最も感激に打たれるのは國際化の新鮮味で英・米・佛・獨・伊各國文化の攝收不捨が小氣味よい程に行はれてゐる。これは『千里山學報』が大學の機關雜誌である以上、當然過ぎる程の當然だといへばそれまでだが併しながらその當然過ぎる程の當然に此種の他の雜誌と別つべき一種の新鮮味を感じ得ることを看取し得るではありませんか。『千里山學報』の誇りは茲に存するのではあるまいか。更に新鮮味の實際化に就いて一言したい。或る意味に於て『千里山學報』は新鮮味の實際化そのもののといへる。何故ならば常に實際化を標榜して學園から社會に向つて獅子吼する關西大學の機關雜誌だからであります。敢へて高遠の談理に馳せない常に手も足もみを見つめて生きてゐる社會、動いてゐる民衆を對象としてそれと握手し交歡するといふやうな態度で我が『千里山學報』は編輯されてゐるらしく私は見るのであります。一寸いひ兼ねますが此の實際化といふことは之を大阪化といつてもよいから存じます。大阪化と比照すべきは東京化といふことで東京化の特徴は理論化といふべきであらう。大阪化は實際化の謂で生きてゐる動いてゐる、自ら驅くして息ま

ないことを意味する。かかる意味の大阪化が
髣髴の裏に『千里山學報』に表現されてゐるこ
私は見るのであります。

私の『千里山學報』の現狀に關する感想はこれ
丈でございます。或は汝の『千里山學報』に關
する將來の希望は那邊にある乎』と問はれる
仁があるかも知れませぬが私は豫言者でない
し將また神佛でもないから述べても將來のこ
なきを申し上げることは出来ない。只、私は
素朴的、原始的な新鮮味の持主たる『千里山
學報』の現狀はその國際化、實際化の二態様
を十二分に進展させる底力を包蔵してゐるこ
斷言したいと思ふ丈であります。(昭和二年五
月三十日、千里山で)

(第二〇頁より續く)

爲を取扱はねばならないから。』

それに對して、吾等は既に、輿地利學派が宣傳せ
る個人主義的—心理的抽象こそが誠に空虚な收穫
を生み落してゐる事を知つた。そして此處で問題
となるのは抽象としての抽象ばかりではない。吾
等は既に専ら、抽象が各各の認識行爲の必要な因
子である事を強調した。輿地利學派の人人の缺點
は、彼等が社會的諸現象の研究に於て此等の現象
自體を直ぐ様放棄するに云ふ事にこそ存してゐ
る。此事實は、エル、ストルツマンに依つて誠に
善く公式化せられてゐる。『諸諸の經濟の典型が
分離と抽象に依つて出来るだけ單純にせられやう
が、其等は矢張り社會的でないければならぬ、一ケ
の社會科學はそれ等を對象としなければならぬ。』
蓋し純粹な個人的から社會的に轉移する事は出来
ないから。事實上、一ケの歴史的過渡期が存在し
てゐたにしても、即ち、人類が分離せられた、狀

態から『社會的存在』に事實上過渡したにしても、
此過程を歴史的にそして具體的に記述し、依つて
以つて問題を象形的(活動寫眞的)に解決する事が
唯一に可能であるだろうが。此場合にも亦、文
學的な型を有する理論を定立する事は従つて不可
能であろう。吾等は、例へば、個個の分離せる生
産者が相互に交通する様になり、商品交換に依つ
て結合して追々に近代的な發達せる交換經濟を構
成したと考へやう。吾等は、今や、近代的人間の
主觀的價值評價を認めることやう。それは、それ
以前に構成せられた價格から出發する(其事は以
下ヨリ一層明瞭に證明せられる)。此等の價格は價
格で多少過去に屬してゐる時代の經濟主體の諸動
機から構成せられたのだから。が然し、此等の價
格は價格で、ヨリ早期に構成せられてゐた諸價格

に依存してゐた。後者は、更に、猶ヨリ一層早期
の諸價格に立脚せる主觀的價值評價の結果であつ
た等。吾等は斯くて結局、分離せる生産者の價值
評價—それ自身の中に事實上全く何等の價格要素
を包含してゐない所の價值評價—に到達する、こ
云ふのは、其等の背後には各各の社會的紐帶各各
の社會が缺けてゐるからである。然共、近代的人
間を以つて始まり而も假説的ロビンソンを以つて
終結する如き、主觀的價值評價に關する一ケの分
析は、其過程が正反對の順序で起ることを云ふだけ
に分離せる人間の動機、近代的人間のそれへの變化
過程に關する單純な歴史的記述より以外の何物な
も意味してゐない。其に類する分析は全く單純な
記述を與へてゐる。が一般的價格説乃至は交換價
値説は斯る種類の基礎の上には殆んど建説せられ

得ないであらう。
或る理論の斯る建築の試みは、體系に於ては不可
避的に缺點に満ちた循環に導く、何故ならば、吾等
が一般的理論の限界に立ち止らんと欲する限り、
社會的要素を説明する代りに、其を既與の大いさ
として卒直に認めねばならぬから。此大いさを越
へる事—之は、吾等が既に知つた様に、理論を歴
史に變化する事、即ち科學的研究の一ケの全く別
な分野に足を踏み込む事、を意味するであらう。
されば吾等には唯一つの研究方法のみが残つてゐ
る。而もそれは客觀的方法と、演繹—抽象的方法
との結合なのだ。此結合はマルクス主義的經濟學
の特質を最大限度に示すものである。斯くてのみ
最早や自身の中に不斷に繰返して矛盾を隠す事も
なく、寧ろ資本主義的實在の具體的な研究手段を
提供するところの理論を定立する事が可能となる
のだ。

The Kansai University Bulletin

Published Monthly By

The Kansai University Press

No. 50

June, 1927.

LEADING FEATURES OF CONTENTS

- On the 5th Anniversary of Publication of the Bulletin
..... President, J. Matsumoto.
- On the Occasion of the 80th Anniversary of the Birth
Day of Prof. Ch. Guide..... Prof. T. Miyajima.
- Professor Léon Duguit.....Prof. Y. Sasa.
- L.-C.-A. de Musset
-Mr. Y. Kawamori, Lecturer of the University.
- University News.
- Alumni News—Mr. Y. Yoshinaga, Alumnus.
- Students' Activities.
- Miscellanea.
- Illustrations—Bust of Prof. Ch. Gide—Prof. Duguit and
His Signature—Inaugural Meeting of the Society
of Journalism and Mr. Oye and Mr. Takaishi—
Dr. Seki, Mayor of Osaka at the University—
Prof. Murakami leaving Kobe for Europe—Inter-
secondly School Oratorical Contest Held by the
University—Oratorical Meeting of the Preparatory
Boys—Officers of the University-Bulletin Bureau.

製複許不

大正十一年六月十五日創刊
昭和二年六月十三日印刷
昭和二年六月十五日發行

編輯兼發行人 辰巳經世
大阪府此花區上福島北二丁目
關西大學學報局

印刷者 飯田彌之助
大阪府西區土佐堀通四丁目五番地
株式會社 三有社

印刷所 三有社
大阪府此花區上福島北二丁目
關西大學學報局

發行所 關西大學學報局
大阪府此花區上福島北二丁目
關西大學學報局

關西大學
電話土佐堀一〇四九
電話土佐堀一五五七〇

千里山學會
大阪府外千里山
關西大學
電話吹田一三三

千里山學報
創刊五周年
記念懸賞論文募集

千里山學報創刊五周年を記念するため左の通り懸賞論文を募集す。學生諸君は振つて應募せられたし。

- 一 應募資格 本學學部、大學豫科及び専門部學生に限る。
- 二 論文種別 法律、政治、經濟、商業、文學に關する學術論文に限り、文藝作品、時事問題批評等は採らず。
- 三 論文分量 十行二十二字詰原稿紙十五枚以内に限る。
- 四 締切期日 昭和二年九月末日限り。
- 五 審査 論文審査は本學專任教授並に講師に委嘱す。
- 六 發表期日 審査の結果は昭和二年十一月十五日附發行千里山學報誌上に於て發表す。
- 七 當選者 論文の優秀なるもの十篇を選び賞品を授與す。尙ほ當選論文は發表後毎月一篇乃至二篇宛千里山學報に掲載す。
- 八 送稿先 右締切期日までに到着するやう大阪府福島關西大學學報局宛郵送又は持參すること、尙ほ封皮に「懸賞應募」と朱書するを要す。
- 九 備考

イ 文體は隨意なるも假名はいろは假名を用ひ墨又はインクにて明瞭に記載することを要す。
ロ 原稿には必ず論題及び應募者の部、科學年並に氏名を明記すをこと。

昭和二年六月

關西大學學報局

關西大學教授 宮島綱男先生校譯

アルフレッド
マーシャル
經濟學論集

― 近日中に出來發行の豫定 ―

本書は先年物故せる世界經濟學界の巨人アルフレッド・マーシャルの業績を記念するため、その高弟エー・シー・ピグー教授が編纂、發行したものである。その收むるところ、遺稿中の重要な文獻十數篇を主とし、加ふるにピグー教授の回顧録、ジェー・エム・ケーンズ氏のマーシャル傳その他親しく故人の教へを受け、現に單り英國に於てのみならず全世界の學界に名を競ふ經濟學者數氏の筆に成る恩師を偲ぶ文獻數篇を以てしてゐる。嘗に經濟學の研究に志す學徒に取つて必讀の書たるのみならず、一個の人格として偉人が印せる足跡を辿る意味に於て、一般讀書子に取つても亦悉く金玉の文字たるを失はぬであらう。

大坂市西區阿波堀通四丁目

株式會社

大坂寶文館

祝 創 刊 五 週 年

昭和二年六月十五日

關西大學
關西甲種商業
指定洋服商
關大第二商業

大阪市上本町六丁目

長谷屋號

電話南四五二番
振替大阪五三八番

●今宮支店 ●釣鐘町支店

關西大學
關西甲種商業
指定
同第二商業

大阪市此花區上福島北三丁目

明文堂
野島書店

電話土佐堀一二八六番
振替大阪三九九一番

本學校友 野島藤次郎

文房具、制帽
雜貨、食料品

關西大學給品部

千里山學舍學生控所
福島學舍學生控所 內

關西大學御用達

歌橋寫真館

大阪市此花區上福島中二丁目
電話土佐堀二七五一番

關西大學
關西甲種商業
指定

山本靴店

大阪市此花區上福島北二丁目
(但澤正橋筋大和田銀行前)

帽子と印象
よいコントラスト!!
御用命を願ひます

關西大學御用達

新らし屋帽子店

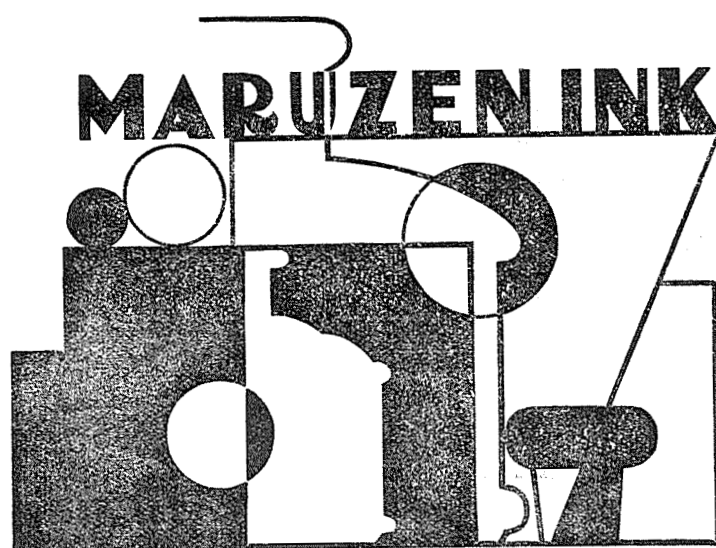
大阪市此花區上福島正橋通
(但阪神踏切南延命館南隣)
電話土佐堀五七〇五番

日本のインキを代表する

丸 善 イ ン キ

萬 年 筆 用

ア テ ナ イ ン キ



どこの書店にも文具店にも有ます

丸善株式會社大阪支店

大阪市東區博勞町四丁目心齋橋北